

東光原

57

熊本大学附属図書館報 Kumamoto University Library Bulletin
TOKOGEN ISSN 0917-7604 <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>

March 2010

特集号

第二回 東光原文学賞 受賞作発表



大学教育機能開発総合研究センター横 夏目漱石像

大賞

「祭囃子」

優秀賞

「空白」

「瞳の中に夜を視る」

「ふこうのこども、
幸福な花。」

第二回東光原文学賞受賞作品 目次

館長のことば 熊本大学附属図書館長 入口 紀男

言葉も人生の「贈り物」である ― 第二回東光原文学賞の表彰式にあたって ―

・
・
・
4

大賞

祭囃子

夜行 よる ゆき

(文学部歴史学科一年)

・
・
・
6

優秀賞

空白

東陵太郎

(文学部人間科学科四年)

・
・
・
18

優秀賞

瞳の中に夜を視る

彩瀬 夏夜

(法学部法学科一年)

・
・
・
31

優秀賞

ふこうのこども、
幸福な花。

田中 ちひろ

(理学部理学科一年)

・
・
・
44

選考を終えて

小野 友道 「総評」

・
・
・
53

西川 盛雄 「講評 想像力を捕捉する言語表現力への挑戦」

・
・
・
54

岩岡 中正 「講評」

・
・
・
55

言葉も人生の「贈り物」である

— 第二回東光原文学賞の表彰式にあたって — 附属図書館長 入口 紀男

第二回東光原文学賞授賞式は、去る一月十五日午前十時半から附属図書館二階の館長室でとり行われた。大賞一名、優秀賞三名の学生に表彰状と副賞がそれぞれ手渡された。記念撮影の後、受賞者は、新聞記者のインタビューに応じて受賞の喜びなどを語った。受賞者の氏名と受賞作品名は、直ちに附属図書館のロビーに掲示された。掲示板には受賞者の出身高校名も表示された。翌日附属図書館をセンター試験の控室とした高校生は、その掲示板を見る事ができた。ここに、東光原文学賞の第二回の事業が完了したことを報告する。



東光原文学賞は、附属図書館が主催して昨年度始められたものである。前館長である田口宏昭教授におかれてはこの意義深い事業を残していただいたことに深く敬意を表する。

第二回東光原文学賞においても、応募資格者は本学学生とし、大学院生および留学生を含む

こととした。また、ジャンルを昨年度と同じく「小説」とした。募集期間を平成二十一年六月二日から十月三十日までとした。この間に二十編の作品が投稿された。

ご協力いただいた全学の関係各位と、附属図書館運営委員の先生方、そして数ある作品の中から特に優れた作品を選びいただいた選考委員会の小野友道委員長（熊本保健科学大学学長）、西川盛雄名誉教授、岩岡中正法学部教授にあつく御礼を申し上げる。また、この事業のために特別のご尽力をいただいた梅原真一学術情報部長、永田正次図書課長、成田和則副課長、浦田博臣副課長をはじめ、附属図書館関係各位に対して真にその労をねぎらう。

小説を書くという仕事は、実は真剣勝負といってよい過激な仕事である。小説を書くには、まず小説世界が本質的に実在する世界の住人にならなければとうてい書けるものでない。これも容易ではない。筆者の視点で書き始める。感情が移入される。いつの間にか主人公の視点で描きつづける。気がついたときは第三者の視点で書きつづけている。それも、主人公の回想シーンの中の記述となっている。小説を書くには、四割の意志と、三割の努力と、二割の才能と、そして一割の運（出遭い）がものを言う（と私は考えている）。それでも、自分がこの世界に生きた証として作品を残す。そのことが自分に力を与える。読んだ人にも力を与えるのである。

小説は言葉でできている。そして奇跡の人生を語ってくれる（ことがある）。人生とは、非論理的な力が魔法のような形をなしてこの世界に体現したものである。それは素晴らしい驚異に満ちている。言葉は、宇宙が、夜空の星々が、我われにくれた素晴らしい「贈り物」である。そもそも人生が、素晴らしい「贈り物」なのであるから。

学生の立場で小説を書くという仕事は、どちらかというと教養の分野に属する。それは確実に教養を深くする。しつかりとした文章、あるいは美しい文章を書く力も身につく。もつとも、卒業後に良いパン（職業）を得るためには、パンを得るための専門的な知識を身につけることも必要であろう。しかし、真の教養は大切である。どのように素晴らしい専門的な知識も、豊かな教養の海に浮かべなければ、わが人生の将来において本当の意味で活かされることはないであろうから。

東光原文学賞のレベルは、昨年と同様、今年（第二回）も非常に高いものであった。今回は惜しくも入選に至らなかった作品も、すべて優れた個性をもって輝いていた。実に、現在は著名な作家も、過去いくつかの文学賞に選ばれなかった経験を持つ人が多いのである。私は僭越ながら、本学学生のもつ「言葉づくり」の資質において非常に明るい未来をひそかに感じるものであった。

この文学賞が、さらに多くの学生に周知され、毎年多くの優れた作品が投稿され、附属図書館の事業としてさらに発展することを切に願う。

いりぐち のりお 総合情報基盤センター教授



第二回東光原文学賞大賞受賞作品

祭囃子

満月も霞むほどに煌々と輝く、石灯籠が美しかった。

一千年以上の歴史を持つ仁田八幡宮。その年に一度の例大祭とあって、夜明け前にも関わらず境内には大勢の人が集まっている。

祭りの当日になっても、やらなければいけない事は山積みらしい。屋台や奉納行列、その他例大祭運営の一切を取り仕切る里久の家族は、それぞれ敷地のどこかに散ってしまっていた。

準備に追われる人々の間を里久はちよこまかと飛び回る。

奉納行列に参加する人々が着る、色とりどりの法被が羨ましい。

「何でこんなの着なきやいけないのかな……」

少し大きすぎる法被の袖を振って、里久は不満げに口をとがらせた。

着ている法被はとても地味だ。深い紺色は、灯籠に照らされても全く目立たなかった。

白文字で「大鶴一家」と書いてあるのも、なんだか大きな名札を張り付けているようで恥ずかしい。小学校で付ける小さな名札だった嫌なのに、こうでかかと書かれていては堪ったものではない。背中に花の模様はあるが、これも特大のハンコで押したような感じ

夜行

がしてつまらなかった。

本当は、鮮やかな色の法被や可愛い浴衣が着たかったのだ。

けれど祭りのお世話をする自分の家族だけは、住んでいる地域とは違うこの法被を着ないといけないらしい。

散々駄々を捏ねたけれど、こればかりはダメだった。お祖父ちゃんには仕方がないとして、周りのおじちゃん達はいつもワガママを聞いてくれるのに。

顔は怖いけれどもとっても優しいリュウジさんまで、「お願いしますよ、お嬢さん」と言ったから、里久は渋々袖を通したのだった。

石造りの階段に腰掛けて、ちえ、と小さく舌を打つ。

暫く周りを観察していると、屋台の前で仕事をしているリュウジさんを見つけた。目が合って軽く手を振ると、こちらに近づいてくる。

「眠くはないんですか、お嬢さん」

「全然。だって昨日は7時に寝たもん。見たいテレビがあったのにさ、お祖父ちゃんが『寝な』って」

「はは……まあ、長い事歩かないといけませんからねえ。お嬢さん、行列に加わるのは初めてでしょう。午後は神輿も追っかけなきやい

けないしね、おやっさんは心配してるんですよ。途中でへたって、屋台で楽しめないと可哀そうだって」

「心配し過ぎだよ。あたし、そんなにヤワじゃない」

「おお、こりやあ頼もしい。流石は大鶴一家のお嬢さんです」

「……………」

「そう拗ねないでください。ああそうだ、ラムネ飲みます？」

「…飲む」

こくりと頷くと、リュウジさんは「じゃあちよつと待ってて下さいね」と笑って階段を下り、屋台の方に戻って行った。

「……………遅いなあ」

十分ほど経ってもリュウジさんはまだ帰って来なかった。

もしかしたら別の仕事を頼まれてしまったのかもしれない。そう思っただけで立ちあがりかけたとき、リュウジさんは何故故里久の後ろ側から戻ってきた。

「遅くなって申し訳ありませんね、お嬢さん」

無骨な手の中でキュボンと音を立てた後で、蓋が開いた瓶を渡してくれる。

しゅわしゅわと炭酸が喉を焼く。ほう、と里久は息をついた。

「リュウジさん、お祭りは上手いききそう？」

「ええ。多少バタバタはしてますがね、これはいつもの事で」

「そっか。良かったね」

「はい。…………あれ、なんだか元気ありませんね。どうしました」

「……………何でもないよ」

里久はラムネを口に含みながら、紺色の法被があちこちで動き回っているのを眺める。あれは「テキ屋さん」の仕事着なのだ、その母から教わった。

やっぱり、仕事着だからあんなに地味なんだなあ、ぼんやり考える。

里久は何度目かの溜息を吐いて、家業だというその仕事に思いを巡らせた。

よくは分かっているけれど、「テキ屋さん」というのは、地域の人達と協力して、お祭りを良いものにする仕事らしい。

屋台の配置決めから始まって、仕入れ、搬入、営業まで全てに顔を出す。力仕事は一家の主である祖父の息子たちの担当だ。

血も繋がっていないし、名字も違う彼らは本当の家族ではない。

けれど、「大鶴一家」に属しているから「息子」なのだという。

それって「子分」って言うんじゃないの、とリュウジさんに聞いた事がある。その時、「そういう面もありますが、やっぱり自分はおやっさんの息子なんですよ」と返されて、なんとなく納得してしまった。ちなみに里久の父親は普通のサラリーマンで、テキ屋の仕事はしない。

地域の人たちは、お祖父ちゃんとても仲良くしている。今年は奉納行列の勢子の仕事も任せてくれた。祖父は皆に慕われている。

それでも、やはり「テキ屋」というのは普通の仕事ではないのだろう。かつちりとしたスーツ姿で出勤する父の姿を見る度に、里久はそう思うのだ。

——だから里久は、誰にも「一緒にお祭りに行こう」と言わなかった。

友達からは何度も何度も誘われた。本当はとつても行きたかったけれど、全てのお誘いに、里久は笑って首を振った。「今年は行列もお神輿もやるから、ごめんね」と。

だって、祭りは家族の仕事場だ。

学校の皆は「テキ屋」がどういうものか知らないけれど、祖父の「息子」達と里久が親しげに話しているのを隣で見たら、それだけで怯えてしまうかもしれない。ちよつぱり外見が怖い人が多いから。

里久はリュウジさん達が誤解されるのも、友達を怖がらせるのもいやだった。

ラムネの冷たさを感じながら暫く押し黙る。

瓶を傾けて一気に飲み干すと、ふいに寂しくなった。

お雛子も、お神輿も、美味しそうな匂いが漂う賑やかな屋台もみんなみんな大好きだ。けれど、やっぱ一人はつまらない。

里久はいつもそうするように、隣に座る「家族」に不満をぶつけた。

「ねえリュウジさん、退屈」

「退屈…ですか」

「うん」

「ううん、そうですね…」

短く刈り込んだ頭をがりがりと搔いて、リュウジさんは低い声で唸る。十歳になったばかりの子供の我儘に、いい年をしたこの大人はひたすら真面目に向き合ってくれるのだった。

リュウジさんは少し考え込んで、やがてぼんと手を打った。

「じゃあ、ちよつとばかり面白いお話でも」

「お話？」

「ええ。自分がガキだった頃に知った話ですよ。お嬢さん——『けもの神輿』はご存じですか？」

「ううん、知らない」

あつさり言うと、リュウジさんは苦笑した。

「ああ、やっぱりなあ。ま、それでこそ話し甲斐があるってもんですがね」

「ね、それってなあに？」

「はい、はい。今お話しますよ…まあ、お聞きなせえ」

里久がじつと目を見たのを確認すると、リュウジさんはゆっくりと不思議な話を切り出した。

むかしむかしのその昔、まだまだ世間の人々が妖怪の存在を信じていた頃のこと。

その年も変わらず行われた八幡宮の例大祭。色とりどりの着物の間をすり抜けて、一人長屋の方に向かう男がいた。

煤けた黒色の羽織を背に被せ、肩で風を切って歩いているのに草履の音一つ立てない。男は盗人であった。

祭りの日は、本当に仕事やりやすい。

残らず空になった長屋を悠々と物色していく。良さそうな家には素早く忍びこんで、金目の物を懐に入れた。

わき見をしながら飄々と歩いていると、

「うわっ」

正面から突然何かにぶつかられて、男はよろめく。

なにかと思えば、緋の着物を着た幼子である。

思いきり衝突したのだがさして痛がる素振りも見せず、ただ驚いたようにこちらを見上げています。人にもぶつかって置いてウンともスンとも言わぬとはどういう見だと、男は思った。

「何だア、坊主」

「……」

子供は答えない。おそらくそこの民家から持ってきたのだろう、小さな手には持てるだけの食糧と酒が握られていたが——子供が酒などおかしな話だ。親の遣いか…いや、この辺にはやたら悪童が多いという。さては同業だろうか。

なににせよ、自分が盗人だと役人に告げ口されたら堪らない。

はっとしたのもう遅く、子供は男が声をかける前に走り去ってしまった。

あらかたの長屋を巡って仕事を終えた男は、盗んだ金で酒を買い、

八幡宮の裏で寛いでいた。戦利品を目の前に並べて、換金すればいくらになるだろうかとにんまりする。

ふいに、山の奥からお囃子が聞こえた気がした。

「やべっ……」

盗品を見られたら面倒な事になると、慌てて品物をかき集めて懐にしまった。

それにしても、神輿の時間にはまだ早いはずだ。誰かが笛や鼓の練習でもしているのだろうか。

人がいるのか確かめないと、どうにも落ち着かない。

慌てて山に入った途端、男は魂消た。獣道の真ん中で先ほどの子供が、こちらを驚いたように立ち尽くしている。

これだけならば大して驚くような事ではない。しかし子供の頭にはふさふさした耳が生え、着物の裾からは尻尾の先がちよこんと覗いていたのだった。

間違いない、狐だ。

確信を持った男は、再び逃げ出そうとした子供の首根っこをひつつかむ。暴れる手足に呼応して、耳までもびくびくと動いた。

「おいこら、待ちあがれ」

「やだっ」

「大人しくしろって、この……」

ごつんと拳骨を落とすと狐は逃げるのをやめた。殴られた箇所をさすりながら、恨めしそうな顔で男を見上げる。

「子供に何すんだよう」

「やかましい、暴れるのをやめねえからだ。つと……」

相手は人外であるが、窃盗を誰かにバラされて困るのに変わりはない。しかし直接「俺が盗みをしたのを見たか」と聞くわけにもいかないので、会話を続けて、様子を見ることにした。

「お前、さつき長屋から色々持ち出してたろ。ありやあ何でだ」

「お腹が、減ってたから……」

「盗んだ、という訳だな」

「盗まずそんな顔をして、狐はゴニョゴニョと呟いた。表情から見るに、男が盗人であるのにも気づいていないようである。

「やれやれ。飯くらい、親に貰えば良からうに」

「気を緩めた男がそう言うと、狐の方は明らかにむっとした。

「父さま母さまは何もしてくれん！ 大人はみんな神輿の準備で忙しいんじや！」

「神輿？お前ら狐も神輿をやるんか」

「……あ」

しまったという顔をして子狐は黙ったが、男の拳固をちらりと見て渋々と喋り出した。

「……今日はおいら達も年に一度のお祭りだから、山にあっちこっちから妖怪がわらわら集まっとなる。今年はおいら達が神輿番なんじや」

「妖怪祭りに狐神輿か。面白そうだ」

「おいら達は『けもの神輿』って呼んどる。来年は大神で、再来年は……忘れっちまった」

「ほほう。子供は、神輿を担がせてもらえねえんだな」

「ん。おいら達は後を追っかけて行くだけで、準備もさせてもらえん。それでも皆は大人の周りをちよろちよろしてるけども……」

要は誰とも遊んでももらえなくて、退屈しているらしい。

——こちらの祭りで暇を潰そうと誘えばついてくるかもしれない。なんせ妖怪の子だ。そのまま逃がさず売るところに売れば、大金になるかもしれない。

男は金の卵をひつつかんだまま頭の中で算盤を弾いて、くつくと笑う。

しかし、更に神輿や祭りの詳細を尋ねようと口を開いた矢先——

山奥から竹笛の音が高らかに響き渡った。

「始まった、父さまの神輿だ！」

「狐が嬉しそうに叫ぶと同時に「ぼん」と軽い音がして、男の手から着物の感触が失せる。見えない力で突き飛ばされ、したたかに尻を打った。

「くそっ」

悪態をつきながら立ちあがると子供の姿がない。

どこに行ったかと周りを見渡せば、そこいら中に生えている草の陰に小麦色の尻尾が引っ込んだのがちらりと見えただけだった。

男はそれから山の中を必死で探しまわったが——結局、子狐も『けもの神輿』も見つからなかったという。

「——と、まあこんな話です。面白かったですか？」

リュウジさんがおどけたように手を広げる。里久は夢から目覚めたような感じがして、目をしばしばさせた。

純粹に楽しめるといふより、興味が沸くような話だった。

「うん。……でもよく覚えてるね」

「小さい頃の面白い話ってのは、なかなか忘れないもんですよ」

「本当の話じゃあないよね、御伽話だよ」

「さあ、どうでしょうねえ……お嬢さんは、どう思いますか？」

真面目な顔で質問され、里久は視線を落として考え込んだ。

「うーん……どうだろ」

現実として見る、というには無理があるお話のような気がする。

けれど、実際この山には妖怪を祀った祠がたくさんある事を里久は知っていた。それにこの話こそ初めて聞いたが、人が妖怪に化かされる話ならばこの地域にも伝わっている。

妖怪も、お神輿も、実際にあるのだろうか。昔の人の想像ではな

くて。

「……本当だったら、楽しいだろうな」

ぽつんと言うとリュウジさんは嬉しそうに顔をほころばせた。

「おい、龍二。お前そこで何やとる」

「！」

凜とした声音に、大きな身体がビクリと跳ねた。

「あ、お祖父ちゃん」

階段の下から、ねじり鉢巻きを締めた祖父が里久たちを見上げていた。

里久と目が合った祖父は一瞬だけにこりとしたが、すぐにリュウジさんに向き直った。「息子たち」よりずっとずっと身体は小さいのに、彼らを前にしたお祖父ちゃんはすくなく大きく見える。不思議だと里久は思った。

老人は掠れた、しかしよく通る声で息子を宥める。

「行列がもうじき始まるぞ。里久と遊んでもらうのはありがたいが、お前は太鼓持ちやろうが。のんびりしとったらいかん。急げ」

「あ、す、すんません。じゃあお嬢さん、アタシはこれで」

「あ、うん」

バタバタと遠ざかって行く背中に「またね」と手を振って、それから里久は首をかしげた。祖父も同じ仕草で「あいつ、さっき言っといた仕事はやつとるんかな」と呟いている。

それからふと思いついたように、里久に向かって手招きをした。

「里久、ちよつとおいで」

「ん、」

階段を下りた里久の手に握られたのは小さな巾着だった。中にはお札が一枚と、硬貨がじゃらじゃら入っている。

「これで好きなもん買いなさい。うちは稼業が稼業やし、お祖父ちゃん達のせいでお友達と遊べんのやろ」

「そんな、いいよ。こんなにいっぱい」

「遠慮せんで貰つとき。使い切らんでも、貯めとけばいいんやし。この巾着もあげるからの」

「いいの!？」

思わず大きな声を出すと、祖父はにっかりと笑って頷いてくれた。「じゃ、お祖父ちゃんは今行くから。里久も遅れずにな」

「うん！ ありがとう！」

後ろ手に手を振って、お祖父ちゃんは人ごみの中に消えていった。巾着を目の高さまで持ち上げて眺める。くしゃつとしたちりめんがとても可愛い。お金も嬉しいけれど、巾着の金魚柄がさらに里久の胸を弾ませた。

どどん、と太鼓の音が響いて、行列が始まるのが分かった。舞い上がった気持ちのまま、里久はお囃子の方へ駆け出していく。

*

沈みつつある太陽に照らされた街を、里久は一人で走っていた。遠くでお祖父ちゃんの声が聞こえる。神輿を担ぐ大人達の、威勢のいい掛け声も。

本当は皆の後をずっと追いかけていないといけなかったのだけど、そういう訳にもいかなかった。神輿が八幡宮を出発してから暫くして、巾着が無くなっているのに気付いたのである。

途中で足が疲れた、女の人達が押すりヤカーの上に乗せてもらって、その後が良くなかった。巾着はきつと、もらった缶ジュースの蓋を開けるのに一生懸命になっていたときに膝から滑り落ちたのだろう。喉がカラカラだったから冷えたジュースが嬉しくて、そのせいで気

づくのが遅れたのだ。

「巾着、どこ行っちゃったんだろ」

土埃は払えばいいが、破れてしまっていたら悲しい。いや、このまま見つからないのが一番悲しい。「もしかしたら誰かが拾ってくれたかも」と淡い希望が浮かんだが、またすぐに不安になった。中にはお金がいっぱいだ。袋ごと盗られちゃったらどうしよう。

涙目になりながらコースを逆走する。辺りにはもう誰もいない。神輿を眺めていた人々は八幡宮の屋台に向かったか、家に帰ったかのどちらかだろう。

走って走って、とにかく電柱の陰を探し、道の隅っこにまで目を凝らした。神輿とだいたい距離が空いてしまったのか、あれだけ賑やかだったお囃子も全く聞こえない。

「……あれ」

ふっと立ち止まって辺りを見回し、それから里久は青くなった。道に並ぶ、シャツターの閉められたお店の看板に全く見覚えがない。番地が書いてあるプラスチックの看板はボロボロで、文字が読み取れなかった。それに、すっかり影の落ちたアスファルトの感じが、なんだか八幡宮の近くと違う気がする。探している内に、神輿が通ってきたコースからも外れてしまったらしい。

里久は、全く知らない場所に出ていた。しまった――。

来た道に戻ろうか。振り向いて数歩進んだところで足が止まった。道を、覚えていないのだ。地面ばかり見ていたから。

携帯電話は持っていない。公衆電話は探せばあるのかもしれないけれど、まずお金が無かった。貸してもらう人すら、ここには一人もないのだ。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

右も左も分からなくて、まるで迷路にいるような錯覚を覚える。

薄暗い闇に自分の体が包まれてしまいそうで里久は焦った。身体が徐々に強張って行くのを感じる。初秋のひんやりとした風が首筋を撫でた。

「……………」

す、と息を吸いこみ、ゆっくり吐き出す。里久は竦みそうになる足を踏ん張って、必死で気持ち落ち着けようとした。

日はまだかろうじて落ちていない。暗くなってしまうけれど、季節が夏だったならきつと十分明るい時間帯だ。そんなに迷ったわけじゃないんだ。巾着を見つけたら次は電話を探して、家の誰かに迎えに来てもらおう。……大丈夫、大丈夫。

「とりあえず、巾着を見つけないでちや」

里久は胸元をぐつと握って再び前を見据えた。

「？」

風の音に混じって、しゃん、と鈴の音が聞こえた。

音は短く、すぐに闇の中に溶けてしまったけれど、里久の耳にはしっかりと涼しげな響きが残っている。

お神輿が戻ってきたのかな。

しかし、すぐに誰も鈴など持っていないなかった事を思い出した。そもそもコースを見失って迷っているのだから、そう簡単に会える筈もないのだ。

目を一度閉じて、じ、と耳を澄ます。風は今も吹き抜けているけれど、鈴の音は一度きりで、どこから聞こえてきたかも分からなかった。暫く待ったが、結局人の心配がしないのを再確認しただけだ。

寒さと恐怖で身体が小さく震えだす。いつまでも此処にいちや駄目だ。そう闇に向かって歩き出した里久の足は途端に止まった。

道の奥に見える光——あれは、何だろう。

それは里久が手を伸ばしても届かなさそうな高さにあった。しかし、誰かが掲げているような感じはしない。提灯ならば持っている

人の形くらい見えそうなものだけれど、それもない。ただ空中にぼうつと点っているようだ。

里久は小首を傾げて訝しんだ。

「……さつきまでは、無かったのに。」

ひゆうひゆうと鳴る風に背中を押されて、促されるように前へ進んだ。二歩三歩と近づいていき、点のようだったその光が野球ボール大に見えだすと——それは里久から遠ざかりだした。

「なんで！」

躍りになって追えば追うほど光も逃げる。数分と経たない内に「提灯を持った誰かが意地悪しているのだろうか」という考えは消えた。

提灯ならばもつとずっと大きい。それに、空中をふわふわと漂うようになったそれが——里久には、火に見えたのだ。

小さな炎を追いかけて少女は走る。細い足が地を蹴るたび、二つにくくった髪が大きく揺れた。曲がり角をいくつも過ぎている内、いつの間にか地面はアスファルトから土へと変わり、空は木々に覆われて真っ黒になった。山道に入って、むき出しの足には小さな引っかけ傷がたくさんついた。けれど澄んだ両目にはもう、オレンジ色の光しか映っていない。

どれくらい走ったのだろう。肺がとても苦しい。ぜえぜえと息を切らしながら、里久は最後の力でタン、と足を踏み切った。

「……………！」

視界が一気にひらける。目の前に現れた真っ赤な鳥居を見て——里久は、自分が八幡宮の裏山の最奥に着いた事を悟った。

そして少女は、鳥居の向こうの光景に瞠目したまま動けなかった。大きな、本当に大きなお神輿が石畳の広場の真ん中に鎮座している。立派な装飾を施された金箔張りのそれは炎にきらきらと輝いて眩い。羽を広げて神輿のてっぺんとまる鳳凰は、今にも冷たく澄んだ空気を切り裂いて、何処かへ飛んでいってしまいそうだ。

追いかけていたオレンジ色の炎はいつの間にか増えていた。空中を自在に飛び回って、広場をちらちらと照らす。神輿から視線を外した里久は途端に飛び上がって、慌てて近くの大木に身体を隠す。神輿のすぐ傍に佇むいくつもの影に気づいたのだ。

鼓動が治まらない。顔が、身体が、かっとな熱を持っている。

月を隠していた雲が流れて——里久の皮膚は興奮で泡立った。

ああ、きつと。

きつと、あれがそうなんだ。

がさついた木の幹をぐつと握って、小さく自分に囁く。

『けもの神輿』だ——

心を掻き乱しているのは恐怖ではなく別の何かだ。痺れるような感覚と身体中を駆け巡る熱とを、いつべんに引き起こしている何か。

そうだ、周りにいるものも人じゃない。皆ヒトの形をしていて、後姿だけでは和装をした人々としか思わないだろうけれど、顔が違うのだ。

あれは、狐の顔だ。

男物の着物を纏った狐が、月に向かってゆるりとその細い面差を向けた。

「——やあ、今年はほんに好い月だの。去年とは大違いじゃ」

さわさわと木の葉が擦れる音に混じって、確かにそんな言葉が聞こえた。息を詰め、意識をぴんと張り詰めさせると、和やかに続く会話を捉えられた。

「去年か。猫又は災難やったねえ、小降りとはいえ水嫌いには雨はきつい」

「楽器も台無しになるからなあ。いやしかし、今年は良い音が出るだろ」

「えーと。太鼓よし、笛よし、……ありや、鈴がねえや。どこへやった」

「子らが持ってたんだらうよ。困ったもんだねえ、どうしたって神輿に加わりたいたらうさ。今はその辺走り回ってるに違いない」

「さ、そろそろ出発しようや。皆さんきつとお待ちかねだらう」

「ん……待て、安がいないぞ？ 何やってるんだかなあ、仕切りはあいつだらうに」

出発、と聞いて里久の胸は沸きたった。

神輿の見物人もヒトではないに違いない。リュウジさんの昔話の真偽はもう疑いようがなかった。それにしても、彼らと会話こそ交わせてないものの——御伽話の世界に片足を突っ込んでいるというのはなんて素敵なことなだらう。

絶対、あのお神輿についていこう。

目を爛々と輝かせて拳を握ったその時、ぼんと肩に手が置かれた。

「ひつ……」

「あ、静かに静かに」

悲鳴をあげかけた里久の口を細く長い指をした手が塞いだ。背後から逆の手が回され引き寄せられる。がっちり抱え込まれているわけではないのに、いくら暴れても手は外れなかった。

「はいはい、そう暴れないでくださいな。別にとって食ったりしませんし。怖くないから」

里久は暫し恐慌に陥っていたが、背後の人物に散々宥められてやっとな身体を力を抜いた。少女が落ち着いたのを確認したようで手はすりと離れる。

振り向いた里久はすぐさま後ろに飛んで、相手と距離をとった。怯えを悟られないように、ありったけの警戒心を声色に込めて誰何する。

「……おじさん、誰」

月を背負った相手の声は思いのほか若かった。

「おじさんは酷いなあ。まあ、あそこにいる人たちのお仲間ですよ、

お嬢ちゃん」

青年が腰を落として視線を合わせてきたとき、びくびくと獣の耳が動くのを里久ははつきりと見た。

*

「——や、皆さん。お待ちせしちやって申し訳ありませんねえ」

「あ、来た。どこ行ってたんだよ、安吉さん」

「もうそろそろ出発の時間じゃなかったかい」

「へへ、ちょっと野暮用をね……ああ、そうですそうです。皆さん位置について、出発してください」

「子供らが鈴、持ってつちまいたみたいなんだが。どうする」

「ああ……いや、問題ないでしょ。そのままお願いします」

「了解」

待ってましたと狐たちが位置につく。ある者は太鼓を持ち、ある者は笛を手にし、巨大な団扇や幟を掲げ、残りの者は皆神輿を担いだ。

団扇を持った男が、動こうとしない安吉を見て眉を顰める。

「おう、何してんだい。お前も行くんだろ、安」

「ああ——それがですねえ、まだちょっと用が残ってます。皆さん先に出発してくださいな」

「ふうん。それでまだヒトのナリしてんのか。さすがに仕切りア大変だなあ」

「や、面目ない。終わり次第しんがりにくっついて行きますから。」

こっちの方は頼みます」

「よっし、分かった」

狐目をさらに細めて団扇の男は笑った。すぐに表情を引き締め、大仰な仕草で団扇を振る。太鼓の音が大気をびりびりと揺らし——それを合図として「けもの神輿」は広場を出発した。

活気に満ち溢れているがしかし乱れの無い御囃子が遠ざかり、やがて広場にはしんとした静けさが戻った。

がらんとしてしまつた空間で、安吉は大きく息を吐いた。

「……もう出てきて大丈夫ですよ、嬢ちゃん」

「……」

里久はガサガサと音を立てて伏せていた草陰から這い出した。

傷口にくっ付いた草を、顔をしかめながら剥がす。適当に土を払って、不満げに安吉を見上げた。

「なんで、ついてつちや駄目だったの」

「何でって……そりやねえ」

当り前だろうといった風に青年は苦笑したが、里久は納得がいかなかった。

せつかくとびきりに面白いものが見られそうだったのだ。楽しみに取っておいたケーキを目の前で全部平らげられたような気分だった。

里久は聡明ではあったが、基本的にワガママを許されてきた子供であるから、聞きわけはあまり良くない。家庭の事情もあって同年代の子供たちよりかなり胆が座っているから、余計にタチが悪かった。

「別にいいじゃない。こっそり見ていただけだったのに」

「いやあ……そういう訳にもいかないですよ」

「ほんとに、本当に見てるだけで良かったの。邪魔なんかするつもりなかったんだよ！ねえ、何で！」

「……参ったなア」

涙目の少女に食ってかかられて、いかにも困ったという風に安吉は頭を掻いた。額に手をやり暫く唸っていたが、ふと思いついたように手を下す。

「そういえば嬢ちゃん、どうしてこっちに来ちゃったんです。ヒトのお祭りは八幡宮の表のほうでしょうに」

はぐらかされそうな気がして里久は少し躊躇したが、渋々答えた。「巾着、道に落としちゃって——探したら道に迷ったの。それで、鈴の音がして、それから火が見えたから……」

「ああ、鈴！」

やっちまった、と舌を打って安吉はペチリと額を叩いた。

「昔とおんなじように好き勝手遊ばせとくのも考えもんだなア。チビ共はこれだから……鬼火まで見つかっちゃって。あーああ」

「それで、追っかけていったら此処に着いたの」

「……で、神輿云々の話は聞いてたと」

「うん」

何でそこまで知ってるんだろう。

不思議に思ったが素直に頷いた。安吉は何がショックだったのか、肩を落としてブツブツと一人呟いている。

ちよつと色気を出して遊んだらこれだ。まったく自分が人に関わりとロクな事が無い。

口の中でゴニョゴニョとごちていたので、里久にはよく聞き取れなかった。

小首を傾げている里久に、安吉は項垂れたまま囁いた。

「……ねえお嬢ちゃん」

「なに」

「アタシらの祭りは——そつとしておいてやってくださいませんか」
強い視線を向けると、安吉は眉を下げて静かに続けた。

「神輿の御話をするくらいなら座輿で済みますが、實際連れてきたとあつちや個人の戯れじゃ済みません。お友達に言いふらされてもしたら、昔からずうつと続いている祭りが出来なくなつちまう。それは、あんまりでしょう」

「……」

「誰とも一緒にいられない祭りが、つまらないってのはよく分かります。けどね、違う世界にほいほいと足を突っ込むのはやめといった方がいいんです。危ない事もありますしね。……まあ、アタシが説教出来る事でもないんですが」

苦笑した後、青年はすつと頭を下げた。

「頼みます。どうか、分かってやってください」

一人はつまらなかつたから、楽しい事が欲しかった。

それに、ここで諦めれば一生、こんなに不思議で面白いものは見られないに違いない。

……けれど、このまま自分の我儘を通せば誰かが楽しくなくなつてしまう。

里久は暫く考えて——

「……ん」

狐の頼みを、聞き入れた。

*

草木を掻きわけて山を下って行くと無事に八幡宮の裏側に着いた。法被の汚れを払い、髪にくつついた木の葉を取る。すぐにビニール袋を引っ提げたりユウジさんが駆け寄って来た。驚いたような、

ほっとしたような顔をしている。

「お嬢さん！ どこに行ってたんですか！」

神輿が終わってから里久がいけないのに気付いて、それからずっと探しまわっていたらしい。叱りもしないでただ無事を喜んでいるリウジさんに、「ごめんなさい」と頭を下げた。

「いいんですよ、お嬢さんがご無事ならそれで」

腰をかがめ、怖い顔をへらつと崩して笑う。

「あ。それとお嬢さん、コレを」

「？」

さつきから手に持っていた大きな袋を渡された。中には水色の瓶と、菓子と、焼きそばのパック。プラスチックのお面まである。縁日の売り物が、とにかく袋いっぱい詰まっていた。

「今朝はラムネ、渡せないですいませんでした。あの後急に仕事が入っちゃって」

「！」

「遅くなりましたが、どうぞ。色々買ってきましたよ。たこ焼きもイカ焼きも両方持ってきましたし…あと、こっちは林檎飴と綿菓子と……」

嬉しそうに食べ物を取り出していたが、里久の表情を見て、リウジさんの手が止まった。

「どうしました、お嬢さん。考え事でもしてる風ですが」

「……ラムネなら貰ったよ」

「へ？」

「うん。何でもない、ありがと」

——きつと、あの時のリウジさんは。

二本目のラムネに口をつけて、里久はそつと今朝の事を考えた。そんな少女の隣で、強面の男は背を丸めて不思議そうにしていた

が——こちらに近づく人影に気づいて、びんと背を伸ばした。

「お疲れさんです、おやっさん」

「おう。里久、大丈夫やったか」

「うん。大丈夫だよ」

祖父は年齢を感じさせない足取りで、パタパタとこちらに駆けて来た。皺が目立つ手には見覚えのある小袋が下がっている。

「あ、巾着！」

「おお。これ、落としちゃったんだってなあ。いかんぞ、ちゃんと大事にせにやあ」

注意しながらも、祖父は柔和な表情で里久に巾着を返してくれた。思っていたより汚れていない。中身も無事だ。

「お祖父ちゃんが見つけたの？」

「いや。さつきな、よう知らん若い男に渡された」

「若い、男のひと？」

「ああ。目が細くて、やたらと派手な法被を着とったなあ。いきなり『お嬢ちゃんに渡してください』なんて言われたから、何かと思ったがの」

「……！」

里久の頭に、つい先ほど安吉と交わした会話がよぎる。

『……じゃあ、お神輿は諦める。その代わり、』

『その代わり？』

『巾着を、探してほしいの。どこかで落としちゃったんだ』

『あ、さつきも言っちゃったねえ……巾着、ですか』

『うん。金魚がたくさん泳いでて、お金もたくさん入ってるの。失くしちゃったら嫌なんだ』

『へえ。……まあ、それくらいならお安い御用ですがね』

『ほんと？』

『ええ。だからお嬢ちゃんは、寄り道せずにそちら側へお帰んなさい。八幡宮の裏に出るにはその細い道を真つすぐです。少々足場が悪いですから、お気をつけて』

『巾着は——今夜中に、必ず』

——約束、守ってくれたんだなあ。

ちりめんの小袋をきゅっと胸元で握る。色鮮やかな巾着が、紺色の法被にはとても映える事に気づいて、少女の顔はほころんだ。

「リュウジさん、金魚すくい、まだやってるよね。行こう！」

「え、あ、はい！」

押しつけたお菓子の袋の代わりに、ごつごつした手をぎゅっと握って、里久は温かな光の方へ走りだす。

紺の法被が翻ったとき、あちらの世界の祭囃子を、少女は確かに聞いた気がした。

(文学部歴史学科一年)

第二回東光原文学賞優秀賞受賞作品

空白

東 稜太郎

保健センターの診察室は薬の匂いがしていた。もう何度ここへ来たか、わからない。遠藤先生はカルテから目を話すと、私を見て言った。

「どうでしょう、復学して一月経ったことですし、サークル活動でも始めてみてはいかがでしょうか。気晴らしに、例えば写真でも。」

「はい。月曜にでも行ってみます。」

先生は少し慌てた様子で続けた。

「いえ、あくまで気晴らしにということ、義務でもなんでもないんですよ。」

私は目を合わせず、ただ「はい」と答えた。

写真部の部室は整理が行き届いていた。小さなテーブルと椅子が五脚。棚には雑誌とアルバムが並び、部屋の片隅には機材が置かれている。

「嬉しいな。入部希望者なんて久しぶり。歓迎するわ。」

部室にいた女性は椅子から立ち上がり、そう言った。髪が短く、痩せた、美しい人だ。手前の方の椅子に座るよううながされ、腰掛けた。

「休学していたんですが、このたび復学することになって。保健センターの先生に、サークル活動でもしてみてもどうか、と勧められて。」

「なるほどね。遠藤先生が。」

女性はそう言うつてうなずいた。

ドアが開き、背の高い男性が入ってきた。

「ああ、松本君。うちに入ってくれてくれるって子が来てくれたから、紅茶を入れてよ。」

「ほんとはですか？ やった、僕もやっと先輩になれる。あ、紅茶でしたね。ちよつと待って下さいね。」

男性はポットのお湯を薬缶に移して、カセットコンロに火を付けた。

「自己紹介がまだだったわね。私は香野洋子と言います。五年目の四年生です。」

「僕は松本直樹です。三年生です。」

「北園千穂です。一年生です。よろしくお願します。」

二人と握手をした。人の良さそうな人たちだと思いが、二人にも、写真にも、特に関心は持てなかった。

握手をする時、袖から少し手首が見えてしまったが、右手だったので問題ない。

せつかくだからということ、これまでの写真部の写真を見ようということになった。テーブルに並ぶ、紅茶と二冊のアルバム。香野さんは、そのうちの片方を開いた。

「このころの松本君の写真は、若いというか、激しいよね。勢いがあるわ。」

道、夕景、猫、車、男女、古いアパート、花……。松本さんは恥ずかしそうに、少しもじもじしながら紅茶を飲んでいる。ページを繰る手が進む。

「ああ、この辺からもう腕が上がって来てるわね。わりと早かったんだね。」

「いや、そんなでもないですよ。恐縮です。」

交通量の多い幹線道路の写真が、同じアングルから、複数枚撮られていた。それとわかる要素が写っているわけでもないのに、撮られた季節がわかる。それぞれの日付を見ると思った通りの季節だった。なぜ季節がわかるのかは、良くわからない。空気が写せているということなのだろうか。花の写真がまたあったが、先程のよりもよほど良く見える。それが何故かはわからない。

「北園さん、どう？ 松本君の写真。」

「綺麗だと思います。どうしてかはわからないんですが、前のページの花よりもこっちの方が綺麗に見えます。」

「それはね、ピントが花にちゃんと合っていて、かつ花だけにしかピントを合わせていないということ、他の対象物を写していないから、花がより浮かび上がって見えるってことの二つが違うのかな。ピントの方は、カメラを一眼に替えたからできるようになったんだね。花が浮かび上がってるのは、腕だね。背景を抜くって言う

んだけど。」

なるほど、と思った。道具の性能や撮影者の技量は、このように写真に表れるものなのか。香野さんは更にページをめくる。手を止めたページには、マンシヨンの写真がいくつもあった。

「この辺で迷走し始めたのよね。マンシヨンのカラーリングがショコラかモンブランみたいに見えて、そのケーキとしてのおいしさを写したい、とか言ってる。」

「無謀でした。ケーキとしてのおいしさを写したいって言っても、マンシヨンはケーキじゃないですからね。」

「ここにおける松本君の失敗は、意図を伝えるのがとても難しい写真を撮ろうとしたことにあるわね。カメラでも腕でもなく観点の問題。マンシヨンのおいしさを写すなんてプロでも無理よ。」

「いやあ、若かったです。」

「そんなに昔じゃないですよ。」

二人が笑うのにつられて、私も笑った。自然に笑みがこぼれたのは久しぶりだったと思う。香野さんは思い出したように紅茶を飲み、カップを指差しながら言った。

「大体ね、松本君は少女趣味が過ぎるのよ。マンシヨンがケーキみたいって言ったり、紅茶に凝ったり。茶器もちゃんとしたのがいいって言って、これ、半分部費を出して買ったのよ？ 乙女過ぎる。私も八分の一は出したことになるわ。」

「いいじゃないですか。最近こういうのも流行ってるんですよ。男の少女趣味。部もたぶん豊かになりましたよ。」

他のサークルは知らないが、このサークルの雰囲気はとても良いと思う。しかしだからといって、特別魅力を感じたわけでもなかった。ああ、いいねと、テレビでも眺めるような感覚。

アルバムのページは進んでいく。あるところで、写真のないページを挟んで、一枚の写真があった。二人はそれを見て、しばらく口

をつぐんだ。

「松本君、いい写真をけっこう沢山撮ってるけど、やっぱりこれがベストかな。」

「そうですね。僕もそれが、一番良く撮れていると思います。」

その写真は夕暮れ時のどこの屋上の写真だった。背景から察するに、きっと大学のどこかだと思う。髪の毛長い香野さんと、男性と女性、三人が写っている。綺麗な写真だと思いが、どこかにちぐはぐな印象を受けた。香野さんと二人が中途半端に離れているところと、三人が三人とも険しい表情をしているところが気に懸かる。これまでの他の写真と比べてどこが特別良いのかわからなかった。

香野さんは、アルバムを閉じ、膝を叩いて立ち上がった。続けて言う。

「松本君、この時間は暇だって言ってたわよね。北園さん、もし良かったらこれからドライブに行かない？ 松本君の車で、カメラを持ってさ。松本君はいいよね？」

「僕は大丈夫ですよ。」

「じゃあ、せっかくなので、お願いします。」

特に行きたいわけでもなかったが、断るのも面倒だった。先の写真のことは少し気にはなったが、特別触れはしなかった。

構内の駐車場に向かい、紺の車に乗り込む。助手席に香野さんが座り、私は後部座席に座った。松本さんが「後部座席も一応シートベルトを着けてね」と言うので、言われた通りにした。

「ドライブなんて久しぶり。ドライブミュージックばかり聴いてるけど、車を持ってないのよね。」

香野さんはそう言うのと、バッグから取り出したCDを車のオーディオに差し込んだ。ドッドドッドという低音が入った、リズムを重視した曲が流れ出す。それは電子音で、自然と体が揺れるような曲

調だが、メロディは暗く、物悲しかった。

車はいつしか川沿いを走っている。道には枯葉が散っていた。そこから少し外れて田んぼ道に入ったところで、香野さんが「停めて」と言った。そこには、造花が供えられていた。

車を降り、香野さんは大きなカメラを取り出して、造花を撮った。アングルを変え、何度もシャッターを切っている。松本さんは、造花を撮る香野さんにカメラを向けたが、かまえただけでシャッターは切らなかった。私は、昔松本さんが使っていたという小さなデジタルカメラを持たされていたが、何を撮ったものか迷い、広がる田んぼをとりあえず撮った。秋らしい空気が撮れるかどうかを少し意識したが、画面を確認しても、ただ田んぼが広がっているだけだった。

他に何ヶ所かで写真を撮ったが、他の場所では私と松本さんしか撮らず、その間香野さんは写真のことを色々説明してくれた。移動の際には、他県から来た一年生の私に、その土地の色々なことを教えてくれた。

帰りの車内で、香野さんが少し笑って言った。

「例えば何にお金をかけるかでその人の人となりを見るとするじゃない。そうすると松本君、服、写真、ガソリンってところまでは男前な感じなのよ。それが紅茶、少女漫画って続くところが残念なのよね。」

「それを言ったら、香野さんだってテクノミュージック聴いてるの、中々マニアックな感じですよ。女の人で、こんなハードなテクノは。」

二人につられてまた笑った。少しだけ、ここは居心地がいいなと感じた。だが、このサークルでやっていきたいという気持ちになれていたわけでもなかった。

部室の鍵は持たされていて、自由に出入りできるようになってい

たが、再び部室を訪れたのはしばらく経つてのことだった。うんざりした気持ちで授業を受けている時、ふと、松本さんの写真のことが気になったのだ。

部室だけでなく、通路に面した部室のドアの前も綺麗に片付けられている。他のサークルのように散らかっていたら、あの時ドアをノックしはしなかったと思う。

鍵を開けて部室に入る。誰もいない部室は、それでも外より少し暖かかった。松本さんのアルバムを開いた。あの写真はアルバムの後ろの方に収められていて、それ以降の写真は少ない。

屋上の夕景。夕暮れ時の赤が綺麗に出ているから、やはり松本さんは写真が上手いのだと思う。日付を見るに、季節は冬の終わり頃。屋上は右手前から奥まで伸びていて、その向こうにはグラウンドや遠くの建物、山などが移っている。香野さんと私の知らない二人は、写真上では屋上の手前の方に写っていて、皆左の、夕日の方を向いていた。二人の男女は親しげな近さで立っていて、香野さんがのけ者にされているようにも見える。皆、表情は険しい。不機嫌、いやもつと深刻な険しさで、しかしそれが何によるのかはわからない。そして、写っているのが三人だということも、少し気になった。香野さんは、茶器を買うのに何分の一を出したと言っていたっけ……。

しつこく見ていて、薄っすらと、ごく薄っすらとはあるが、その写真の裏に何か書かれているのがわかった。確かめたくて、写真を取り出そうとしたその時、ドアが開いて松本さんが入って来た。

「ああ、北園さん来てたんだ。紅茶入れるけど、飲む？」

「あ、松本さん。お邪魔してます。紅茶いただきたいです。」

写真を見ていたことも、部室に来ていたことも気まずく感じ、答えてしまってから紅茶は断れば良かったと後悔した。

「君もう部員なんだから、お邪魔してまずなんて言わなくていいよ。」

もし飲みたかったら紅茶も勝手に飲んでいいよ。その時は僕の作ったマニュアルを参照のこと。」

松本さんは笑ってそう言うと、紅茶の準備を始めた。少しして、テーブルの上に開かれたままになっているアルバムを見て、言った。「その写真の右側の二人、香野さんの同級生なんだ。男の人が春日さんで、女の人が村崎さん。このサークルの先輩だったんだ。香野さんは一年多く通ってるからまだ大学生だけど、二人はもう社会人でね。まあ、春日さんは色々あって中退したんだけど。けっこう長く付き合っていて、もしかしたらそろそろ結婚するんじゃないかな。良くしていただいたよ。」

私がうなずいていると、紅茶を私に差し出しながら松本さんは更に続けた。

「春日さんはファンキーな人でね。生き様が格好良かった。写真も独特な撮り方をする人で、色んなものの接写ばかりを集めた『質感百景』って特集は素晴らしかった。村崎さんは一見常識人なんだけど、春日さんのあしらい方が異常に上手くて、只者じゃない感じだった。被写体は女性的なチョイスで、上手かったよ。」

松本さんはそれだけ話すと、何かの教材の整理を始めた。なんだか少しほっとした。入れてもらった紅茶も、とてもおいしかった。

話の中に、このサークルの背景となっている時間の流れを感じた。ここにかついていた人たちがいて、その影響を受け継がれている。写真の見え方が少し変わったように思うが、だからといって何かが変わったわけでもなかった。

それなりの頻度で部室に顔を出すようになってしばらくして、二人に「練習に撮ってみなよ」と一眼レフの手解きを受けた。松本さんのデジタル一眼レフを借りて、市の中心街へ行き、思い付いたそばからシャッターを切った。あたりは寒さを増していて、吹く風は

冷たい。空気は乾いていて、街全体が白んでいるように見えた。撮り終わって部屋に戻ると、サラリーマンの後姿ばかりが写っていた。「これには何か意図があるの?」

香野さんにそう問われて、答えに窮しながら、思い当たったところを述べた。

「実家で、父がつまらなさそうにテレビを眺めているのを見て、思ったことがあったんです。六十近い歳にもなれば、目標やら向上心やらを持つのも、億劫になってくるんだろうなって。それに続けて、じゃあ、三十歳ならどうかって思ったんです。あまり変わらないだろうと思いましたが。では十五歳だったら? それもあまり変わらないように感じました。世の中は、人に目標やら向上心やらを持つことを半ば強制しているように思えるけど、実際のところはどうかだろう、と。上手く言えないんですけど。おじさんたちの後姿から、そういったものが見えてこないかと思っただけですが。」

言葉にして初めて、自分が選んだ被写体が何故選ばれたのかわかった気がした。自分の問題意識も少しだけ見えた。人生というものは、どうしてこうも空しく、儂いのか。

「なるほど。でも、ここには、働く男の哀愁であったり、ともすればはつらつさが写っていたりするよね。」

「壮年の男性への憧れや愛情っていう風にも見えますね。こう言うては悪いけれど、人は撮り手の意図した通りには見てくれないからね。」

自分でも、これでは失敗だと思っていた。

「これじゃ駄目ですね。余計なことを考えないで撮った方がいいと思います。」

「いや、良く撮れてはいると思うわ。初めてにしては上出来。それに、被写体は絞らない方がいいし、色々なものを撮った方がいいと思うけど、撮りたいテーマを持つこともまた大事だと思うよ。私は

ね。」

「腕を上げること必要だけど、もっと意図が見えてくるような被写体を探したり、撮り方を探したりっていう努力も必要だね。」

松本さんがまた紅茶を入れてくれた。それが、とても温かく感じた。

香野さんは、紅茶を飲みながら、私の目を見て言った。

「被写体を見つめることは、自分自身を見つめるってことだから。」

季節が移りゆく中で、私の写真は増えていっていた。夕景、夜景に見える家々の明かり、落ちたコスモスの花びら、病気の猫、朽ちた車……。松本さんにデジタル一眼レフを貸していただいたおかげで、ピントの合わせ方や露出の調節は上手くなったと思う。しかし、どの写真にも手応えを感じられなかった。

そんな折、香野さんにまたドライブに行こうと誘われた。松本君の車を借りて、二人で写真を撮りに行こう、と。

「すみません。卒業論文で忙しいところをわざわざ誘っていただいて。」

「いやいや、私自身の息抜きだよ。授業で忙しい松本君には悪いけど。むしろ付き合ってくれてありがとう。」

テクノミュージックをかけながら、香野さんは色々なところに行ってくれた。港、高台、団地。その折々で「私ならこう撮る」という実技を交えながら、様々なアドバイスをくれた。しかし香野さんは自分のカメラは出さなかった。そのことを不思議に思っていると、帰りの海沿いの道で停車し、そこで初めてカメラを取り出した。そこには造花が供えられていた。古いガードレールに混じって、そこだけ新しい白いガードレールの下に。その向こうには海が広がっている。香野さんはそれを、アングルを変え、距離を変え、何枚

も何枚もシャツターを切っていた。

風が強く吹いている。何を撮ろうか迷って、一心不乱に撮り続ける香野さんを見ていて、たまたまその左手首に目が行った。

目がそこにとどまろうとするのを、意識して逸らした。強く心臓が打つのが耳元で聞こえる。そこには、癒えてなお生々しい、深い傷痕があった。香野さんは写真を撮り続けている。

香野さんが、何故？ 普段の香野さんからは想像がつかない。また、その傷痕の深さが、ためらいの無いものだということが私にはわかった。動揺を抑えるため、平静を装うため、上の空で海を撮った。

撮り終えて、車内に戻り、沈黙するのもはばかりられ、しかし話題も見付からず、どうすればいいかわからなくなった。自分で切ったわけではないかもしれない。しかし傷痕は狙ったように真っ直ぐで、深い。まだ鼓動は落ち着かない。私でなかったら、こんなには動揺しなかったのかもしれない。

「なんで、他のものを撮らないで、造花ばかり撮っているんですか？」

口を切ったのはそんな言葉だった。手に、じわりと汗がにじんだ。香野さんは、言葉を選んでいいのか、ためらっているのか、少しの間を空けて、オーディオのボリュウムを落としてから話し始めた。

「誰かが亡くなった時にね、人はまず、生花を手向けるの。一番初めから造花を手向ける人はまずいないわ。なぜそれが造花に切り替えられるかというと、生花をずっと供え続けるのは難しいから。お金もかかるし手間もかかる。生花はすぐに萎れて、枯れてしまうからね。萎れたり、枯れたりした花を取り替える時、その人を大事に出来なかったように思ってしまうというつらさもある。だから、その人の死を悼む気持ち薄れたわけでなくても、どこかで造花に切り替えるのも無理はないと思うわ。だって残された人は生きていて、

それぞれの生活をしなければならいんだから。造花が手向けられているのには、そういう背景があると思うの。」

香野さんはそこで一度話を切った。私は黙って聞いていた。また少しの間が空いた後、香野さんは続けた。

「造花を撮ることには、生花を撮ることとは違う意味があると思う。亡くなった人は現に亡くなっているということ、残された人は現に生きていくということ、その大きな隔たりが、そこにはあると思うの。そこに日常意識されない生が、死が、隠れている気がして、それを私は撮りたい。」

話が終わった後も、私は何も言えなかった。「被写体は絞らない方がいいと思うんだけどね」と笑う香野さんに、笑い返すので一杯だった。

その日、自分の部屋に戻った私は、久しぶりに自分の左手首をまじまじと見た。薄い、しかしもう消えない傷痕が無数に散っている。昼間見た香野さんの傷痕の深さを思った。

何故私は自分の手首を切ったのか、良く思い出せない。その時々理由があったのだろうが、そのどれもがはつきりとした形を成していないもので、今考えてもわからなかった。たぶんその時であってもわからなかっただろうと思う。その時の自分は、自分の死をどのように意識していたか、自分の生をどのように意識していたか、そもそもそういう意識があったか、そう自分に問うたが、何もわからなかった。

台所から包丁を取り出し、今まで何度もそうしてきたのに倅い、手首にあてがった。心の中でファインダー越しにその光景を見つめたが、これは違うと、そう思った。これで見えてくるものは、自分の生でも死でもない。そう強く思った。

思い立ち、夜の大学へ向かった。外は一層寒かったが、気にならなかった。写真部の部室へ入り、松本さんのアルバムを開く。あの屋上の写真を取り出して、その裏に書いてある文字を読んだ。

「僕はあなたを忘れません」

写真を表に返し、写っている香野さんの眼差しを見た。そして、今日の香野さんの、造花を見つめる眼差しを思った。普段朗らかな香野さんがこんなに厳しい眼差しで見つめているものは何か。

香野さんのアルバムを取り出した。そこにはおびただしい量の造花の写真が収められていた。日付を見ると、松本さんの屋上の写真の日付と同じ頃、一年前の今頃からそれらの造花の写真が収められているということに気が付いた。

前から不思議に思っていた。茶器の代金の半分を松本さんが出して、残り半分を部費で出したというなら、香野さんが八分の一を出したと言ったのは何故か。この写真に写っている三人、香野さん、春日さん、村崎さんだけでは足りない。もう一人は誰で、どこに行ったのか。

屋上の写真にもう一度目を落とす。今ではもうわかる。この写真は明らかに他の松本さんの写真に比べて完成度が低い。露出の調節は的確で、とても綺麗な赤が写せている。しかし構図が不自然で、全体的に未完成な印象を受ける。また、微妙にはあるが、ピントもやや中途半端で、狙っているものにピントが合っていないように感じる。しかしそれでいて、他のどの写真よりも胸に迫るものがある。写っている三人の沈痛な面持ちと、それを包む写真全体の不安定な空気。見るほどに、胸がざわめく。

香野さんのアルバムに目をやる。もう一年近くずっと造花を撮っていて、そして造花しか撮っていない。それらの写真は、一つの場所の一つの造花を幾通りもの撮り方で撮っているが、よほど熱心に探したのだろう、よくこれほどと思うほど沢山の場所で撮られても

いた。夕景にシルエットを描く造花、雨に濡れた造花、伸びる線路を構図の中心に据えた造花、夜の街灯に照らされた造花、凧いだ海に手向けられた造花……。露出を過剰にしてこの世ならざる雰囲気を出したり、逆に過小にして忘れられている感じを出したりと、表現に苦心した跡が見える。力が込められているだけのことはある、と思う一方、香野さんがこれで満足できているとは思えなかった。あの厳しい眼差しで、これほどの情熱を傾けても、香野さんが見つめようとしているものはなお遠くにあつて届かない、そう感じられた。

翌日、部室にきた松本さんに、マニュアル通りに入れた紅茶を差し出した。そして聞いた。

「あの、松本さんの写真の中でベストだとおっしゃっていた写真、あれにはどんな意図が込められているんですか？」

松本さんは紅茶に口を付け、「悪くない」と言うと、自分のアルバムを取り出してあの屋上の写真のページを開いた。

「裏の言葉は読んだかい？ ああ、せっかくだから大まかな感想も聞きたいな。」

「読みました。すみません。」

松本さんは笑って、「謝らなくていいよ」と言った。「感想は、その、上手く言えないんですけど、夕焼けの赤が綺麗に出ていて、しかも香野さんの髪がなびいているのがぶれていなくて、絞りと露光時間をかなり綿密に調節したんだと思います。それなのに構図が不安定なのは、たぶん狙っているものだろうと。あ、あと、季節のわりに赤が強いのはフィルターを使ったからかなとも思ったんですが、そっちはまだ良くわからなくて。」

そこまで話したところで、松本さんは大きくうなずいて、続けて言った。

「まだ入ってしばらくなのに、良く勉強できてる。熱心に撮っていたしね。構図についてはその通り。別に立ち位置を指示したわけじゃないけどね。フィルターは保護用のしか付けてなかった。この赤が撮れたのは奇跡だ。」

そこで話を切って、松本さんは紅茶を飲んだ。つられて私も飲む。しばらくの間が空いた後、松本さんが続けた。

「意図については、そうだね、僕は、そこにある空白を撮りたかったんだ。」

胸の内で、空白、と復唱した。

「このサークルには、宮下涼介さんという先輩がいたんだ。当時の部長で、春日さんと二人で部を引っ張っていた。香野さんの恋人だったんだ。宮下さんは二年ほど前に亡くなった。きつと——」

松本さんはそこで言いよんだ。

「——きつと、自殺だった。」

聞いて、胸がずきりと痛んだ。香野さんの手首の傷の深さを思った。松本さんは続ける。

「宮下さんが亡くなって、部には大きな空白ができた。宮下さんがそこにいるのはあまりにも当り前のことだったんだ。それが欠けてきた空白は、とても大きくて、香野さんはもちろん、春日さんも村崎さんも僕も、元のようには過ごせなかった。それこそ当り前だけど。例えば物を失くした時、それはどこかにはあると思っていて、この世から消えて無くなったなんて思わないだろう？ でも、人が死ぬのは、違うんだ。僕は、宮下さんがこの世のどこからも消えてしまったなんて、今でも少し、信じられないでいる。」

そこまで話して、松本さんはその写真に手を触れた。

「この写真を撮れたのは偶然だ。ここからの眺めが綺麗で、僕はよくそこで写真を撮っていた。この時も写真を撮りに行ったんだけど、いつもは五人いて当り前だったんだ。香野さんの隣には、宮下

さんがいて当り前だったんだ。僕は、そこにいたはずの宮下さんにピントを合わせた。それこそ、化けてでも写らないかって、祈るような気持ちで。」

松本さんは天井を仰いで、そして椅子から立ち上がった。部室内を少し歩いて、確かめるように、茶器や雑誌、機材に触れた。

「その空白は今でもここにある。僕が紅茶に凝りだしたのは、宮下さんにつれて行ってもらったギャラリーが喫茶店のようになっていて、その雰囲気は惹かれたからだ。香野さんがテクノミュージックを聴いているのは、宮下さんが好きだったからだ。僕が列車通学をやめて車で通いだしたのも宮下さんが車に乗っていたからだし、香野さんだって四年で卒業していただろうし、春日さんも中退しなかったかもしれないし、ちゃんと新入部員を募っていたら他に部員がいたかもしれない。空白は今でもここにあるんだ。宮下さんがちゃんとここにいれば気付かれもしなかった空白が。空白そのものは写せない、だから、せめてその輪郭をなぞって、この空白を捉えたかった。」

そう言って、松本さんはまた天井を仰いだ。私は、これまでこのサークルで過ごしてきた短い月日を思い出していた。そして、宮下さんという方がいたころのこのサークルのことを思った。

松本さんは香野さんのアルバムに触れて言った。

「香野さんは、この空白の更に向こうを見つめている。」

後日、雨の降る日にまた部室を訪れた。その日はまた一段と寒く、電気ストーブがゆっくりと部屋を暖めるのがじれったく感じる。思えば、部室に頻繁に来るようになった。最後にカメラに触れなかった日はいつだったか、思い出せない。

部室の中でカメラをかまえた。室内の様々なものを狙ってみたが、自分の胸にあるこの思いを写すことはできないと思った。カメラを

下ろそうとした時、ドアの開く音がした。

「あれ？ 撮影中だった？ ごめんね。」

現れたのは、雨で髪を濡らせた香野さんだった。

「あ、いえ、違うんです。大丈夫です。香野さん、けっこう濡れてるみたいですけど大丈夫ですか？」

「うん、さすがに寒いわ。ストーブの近く、いい？」

香野さんは「雨、思ったより強かったわ」と続けて、ストーブの近くの椅子に座ると、バッグからタオルを取り出して頭を拭った。

私は紅茶を入れることにした。

「いよいよ寒くなってきたね。千穂ちゃんが入部した時は、まだ昼間は暑い日もあったのにな。」

香野さんがカップを持つ手は、まだ少し震えている。

「はい。もう結構経ちますね。良くしていただいて、ありがたい限りです。」

「何よ、改まっちゃって。大したことないわよ。」

香野さんは笑ってそう言った。私は、香野さんがもうすぐ卒業してしまうということを考えていた。それまでに何か恩返しができないかと、それも今香野さんを捕らえているであろうことを少しでも何とかできないかと、差し出がましいことまで考えていた。

「香野さん、もう卒業してしまうんですよね。」

「まあ、今年はなんとか卒業できそうだよ。就職先はいまだに決まってるだけだね。」

まだ震えはおさまらないようだ。椅子の上に足を抱えて座る香野さんは、いつもよりもずっと小さく見える。それに、前よりも更に痩せたようだ。

「あの、もし風邪でもひかれたなら、保健センターに行った方がいいと思いますよ。お薬、ただだし。」

「心配してくれてありがとう。わりとしょっちゅう行ってるから、

その時に具合が悪かったら風邪薬ももらうよ。でもたぶん大丈夫。」

そう言って香野さんは手をひらひらさせる。大丈夫だとは思えなかった。体調はそこまでは悪くないのかもしれない。でも、ひどく弱っているように見える。笑顔の絶えない人ではあるが、思い返せばそこにはいつも愁いが差していた。その理由まで知ってしまった今、私に何かできることはあるだろうか。

言葉が見付からず、「大丈夫そうには見えないんですけど」と言った私に、香野さんは「いやいや、これで結構頑丈なのよ」と笑うのだった。胸をよぎる逡巡。私は言葉を探しながら、上手く形を成していない、それでも強く私を捕らえるこの思いを、香野さんに伝えようとした。

「あの、上手く言えないんですけど、このサークルに入ってしばらく経って、私はどこかが変わったと思うんです。前は、無感動で、無関心で、時折わけもなくいらついで。でも、ここに来て、何かが変わったんです。それはお二人のおかげだったんだと思います。その、前よりももっと、深いところが見えてきたように思っています。」

香野さんは私の曖昧な話を、静かにうなずいて、聞いてくれた。

「香野さんのお話を聞いて、松本さんのお話を聞いて、自分なりに何かがかめてきている気がして。昔、何かあるとすぐ手首を切ってしまう悪癖があつて、でもこの前その光景を再現してみても、これは違うって思つて。その、上手く言えないんですけど。」

これでは何も伝えられない。言葉が続かなくなり、うつむいた。何一つ上手く言えない自分が情けなくて、悲しかった。

「千穂ちゃんは、若いね。ああ、別に悪い意味で言ったんじゃないよ。だって、私が一年の時塾で教えてた中学三年生と、千穂ちゃんは同じ年なんだよ。」

香野さんが言葉を選んでくれているのがわかった。

「私や松本君の姿のどこかしらが、千穂ちゃんにいい影響を与えた

香野さんは、造花の花束を抱えて、そこだけ白いガードレールのところまで歩いていった。向こうの海が光って眩しい。屈んで古い造花を取り、新しい造花を供えようとしたところで、香野さんは動きを止めた。心配になるほど長い間そうして、村崎さんが駆け寄ったところで、香野さんは立ち上がってこちらに戻って来た。花束を二つとも持って、私に新しい方の花束を渡して言った。

「今、一つのシーンが浮かんで、それをどうしても撮りたい。千穂ちゃん、あなたが花を手向けてくれない？」

その声は震えていた。私は香野さんの思いを、できるだけ深いところで受け止めたいと思った。

香野さんが機材を準備している間、私は宮下さんのことを考えていた。宮下さんを写した写真も宮下さんが撮った写真も、全て家族の元にあるそうで、顔も知らなければ撮った写真も見ることがない。それでも、ここにいる皆に大きな影響を与え、多くのものを残していったその人のことを思った。恨みもした。気持ちがわかると思っていたこともあった。

「いいよ。行って。」

松本さんに尊敬され、香野さんに愛されていたその人は、もういない。私は自身の気持ちではなく、この花に託された、残された人々の思いが宮下さんに届くようにと祈って、花を供えた。

シャッターの音が聞こえた。

帰りの車内。流れる景色は、光の粒子が粗く、淡く霞んでいる。

皆が静かに景色を眺めている中、香野さんが口を開いた。

「撮ったのはね、私の姿だよ。涼介に花を供える自分自身の姿。私は花を手向ける側にいるんだね。そして涼介は、手向けられる側にいるんだ。当り前のことだけど、それがようやくわかった気がする。ずいぶん時間をかけて、造花ばかり沢山撮ってきたけど、これで

やっ——」

香野さんの言葉はそこで途切れて、嗚咽に変わった。

香野さんは、続きの言葉を言えないまま、ずっと泣き続けていた。

卒業式の日、空は晴れ渡り、暖かい風が優しく吹いていた。晴れ着を着た女性たちの姿。おめでとうという声、ありがとうという声。抱えられた花束。構内に溢れた晴れ着や花々の色の眩しさは、春の穏やかな空気に包まれ、薄く滲んでいる。

香野さんは、卒業式には出ず、私と松本さんと一緒に新入生歓迎展示会の準備をしていた。当然晴れ着も着ておらず、普段通りの姿だ。祝いの席に出る気になれないという気持ちはわかっていたが、それでも「こんな日にすみません」と言う私たちに、香野さんは「謝恩会には出るし、ちよつと用事があるから、それまでね」と笑った。

パネル作りの手を休めて、少し休憩することにした。公務員試験の勉強で松本さんは最近とても忙しくしているので、松本さんの紅茶を飲むのも久しぶりだ。これからもっと忙しくなるだろうし、松本さんが部屋に来る機会も少なくなるだろう。そして香野さんは卒業する。こうして三人で紅茶を飲むのも、これで最後かもしれない。

「ごめんね、千穂ちゃん一年生なのに、新歓展示、任せちゃつて。」
香野さんが手を合わせながら言った。松本さんも申し訳なさそうな顔でうなずいている。

「いえ、たぶん大丈夫です。パネルさえ手伝っていたら、後は何とか。」

「北園さん、頼もしくなったね。写真も上手くなったけど、それだけじゃないよ。最初は心配してたけど、もう大丈夫かな。」

「すみません。恐縮です。」

松本さんは「謝る癖は直した方がいいかな」と言って笑った。香野さんも笑っている。私はまたすみませんと言いたいそうになってしま

い、それでまた三人で笑った。

パネル作りを再開し、最後の一枚の作業に入った。それは、香野さんが撮った、あの海沿いの道の写真だった。作業の手が止まる。

そこだけ白いガードレールに、私が、と言うより誰か一人の女性が、造花を手向けている写真。小さく写った女性の後ろ姿の向こうに、淡く霞んだ海が遠くまで光っている。ピントは海の向こうではなく、造花を手向ける女性に合っていた。構図の中心は海にある、しかし、海は背景として、ただ美しく霞んでいた。

作業は無事終わり、謝恩会が終わった後の待ち合わせの段取りまで決めた。そこで松本さんが「あ、今日は予約してないとまずい。ちよつと行ってきます」と言つて、慌てて居酒屋へ向かった。それで思い出して、香野さんに「用事の方の時間は大丈夫なんですか？」と聞くと、香野さんは「そろそろ行こうかな。ちよつと保健センターに挨拶にね」と答えた。

私ももう保健センターへは行かないだろうと思ひ、挨拶をしたいとも思つた。迷つたが、一緒に行くのは良くないと思つて、香野さんに伝言でも頼もうと考へていると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。ドアを開けると、そこには遠藤先生が立っていた。香野さんが驚いた声で言う。

「先生。今挨拶に伺おうとしていたんですが、わざわざ来ていただいて。」

「いえいえ。お渡ししたいものがありまして、ここにいらつしやつて良かった。少し、お時間をいただけますか？」

先生はそう言うのと、白衣のポケットから封筒を取り出した。先生は「ここではなんですから」と言つたが、香野さんは「ここで結構ですよ」と気にしていない様子だ。先生は少しためらつたようだが、その場で話し始めた。

「こちら、他の病院への紹介状です。最近はいらつしやらかなつたので、必要ないかとも思つたのですが、一応念のためにと。症状や処方した薬について記載してあるので、もし病院にまた行く機会があったら、そちらで渡して下さい。」

「わざわざすみません。ありがとうございます。お世話になりました。」

香野さんは頭を下げ、その封筒を受け取つた。私も「お世話になりました」と言つて、香野さんに伝えてもらおうと思つていたことを先生に言つた。

「写真部を紹介していただいて、ありがとうございます。」

先生は深くうなずいて「今だから言えるのですが」と前置きして、少し険しい顔で言つた。

「北園さん、あなたに写真部を勧めたのは、つい、口を衝いてのことでした。あなたは行くと言いましたね。それを聞いて私の何かが動いてしまつた。香野さん、あなたに新入部員が来るかもしれないと伝えたのはそのためです。医者としてあるまじきことだつたと思つています。今だから、言えるのですが。」

先生はそう言うのと、深々と頭を下げた。少し考へて、何のことを言つているのかわかつた。わかつたが、特に気になることではなかつた。香野さんも「結果的に良かったと思ひますし、気になさることではないですよ」と言つて、私もそれにうなずいた。先生は「それなら、良かった」と笑顔を見せて、その場を去つた。先生を見送つた後、香野さんが言つた。

「千穂ちゃんがここに来てくれて、千穂ちゃんに会えて、本当に良かったと思つてるよ。短い間だつたけど、ありがとうございます。」

「私もです。本当にありがとうございます。」

幸い松本さんの予約は間に合つて、大学近くの居酒屋で追い出し

コンパをすることになった。コンパには、春日さんと村崎さんも、仕事を終えて参加した。

話題の中心は意外なことに私で、これから新入部員もまた入るだろうから、その時はぼちぼち頑張つてと、新入部員が入ったら写真賞にでもまた出そうかと、そのような話をした。もう私は写真部の一員なんだと感じ、嬉しくなった。

酔った春日さんと村崎さんは、香野さんに「俺なんか中退でも大丈夫だったんだ。世間は俺らを急かすが、大丈夫だからゆっくり行こうぜ」「体にだけは気を付けるのよ、洋子」と話し、香野さんは「あんたらは私の両親か」と答えて笑っていた。その笑顔には、愁いは薄れていたと思う。松本さんは私にお酌の仕方を教えてくれていたけど、いつの間にか自ら三人にお酌をして回っている。五人が以前どんな風に過ごしていたのか、少しだけ見えた気がした。

その時不意に、ああこれだ、と思った。私が撮りたかったものは、きつとこれだと。自分の手首の傷痕でもなく、散った花や朽ちた車でもなく、ましてやサラリーマンの後ろ姿でもなく。

私はバイト代でやっと買った一眼レフを取り出し、かまえた。初めて撮るのは何にしようかと迷っていたが、この光景こそが相応しいと思った。

松本さんの空白の輪郭をなぞった写真と、香野さんの空白を背景とした写真が目につかぶ。私は、その空白のこちら側をただ撮りたい。人生の空しさや儚さがそこにあり続けるとしても、その手前の、ただこのように生きているということ。

シャッターを切る。この光景を捉えたいと願った。埋まることのない空白がそこにあるとしても、私はその空白を狙いはしなかった。その手前に残された人たちの、これからを撮りたいと願った。

同じく追い出しコンパで居酒屋に来ていたであろう大学生たちを

背景に、四人の笑顔を撮った。場は活気に満ち、これからの予感に震えている。それはきつと明るいばかりではないだろう。しかし今だけは。ただこの光景を。

(文学部人間科学科四年)

瞳の中に夜を視る

彩瀬 夏夜

猫を見ると癒される、という奴の気がしれない。猫のあの目を見てどうして平静でいられるんだろうか。光の下ではすべてを射抜くような細かい瞳、闇の下ではすべてを吸い込むような丸い瞳。

僕は落ち着かない気持になる。思うに、猫というのは闇を吸って生きているんじゃないだろうか。夜は瞳を最大限開いて闇を取り込み、昼は瞳を最小限開いて世界に闇が満ちるのをじっと待つ。もともと世界には闇しかなくて、でも猫が闇を吸い込むから陽の当たる時間ができた。けどどしどしばらくするとじわじわと闇が溜まってきて、世界には再び夜が来る。

世界の昼と夜はそんな風に成り立っているのだろう、と僕は考えている。そして昼と夜を行ったり来たりしないと生きていけない僕らのことを、きっと奴らは馬鹿にしているんだろう。お前たちが生きていられるのは自分たちが昼を作ってやっていいるからだ、と。

所長に呼び出されたのは、一八八センチ反射望遠鏡の調整を終え

た後だった。

ここ岡山天体物理観測所には望遠鏡がいくつもあるが、一八八センチ反射望遠鏡が最も大きく、日本でも三番目に大きいという光学赤外望遠鏡だ。

この望遠鏡は何年か前に赤方偏移8.2の、地球から非常に遠いところにある天体の残光を捉えることに成功した。後から他の天文台でも詳しい分光観測が行われたところ、どうやらその天体は131億光年かなたの天体であることが分かったらしい。これは世界でも最も遠い天体の残光を観測したものであり、未だにその記録は破られていない。あのときは、おうし座の周りに新たな惑星を発見した時も冷静な態度を崩さなかった所長でさえわくわくした表情を抑えられていなかった。

そんなふうには僕らの研究に無くてはならないこの反射望遠鏡だが、年に一回は蒸着作業というのを行う。反射望遠鏡にとっては光を反射する鏡がとても大事だが、一八八センチ反射望遠鏡の鏡部分はアルミニウム薄膜でできている。しかし、この部分は色々な要因によってだんだんと劣化してきてしまう。そこで年に一度、観測のできない梅雨の時期にアルミニウム薄膜の再生成をするのだ。

その蒸着作業が終わった後、僕ら研究員は再び設置された望遠鏡の細かい調節をしなければならぬ。それが今日の午後いっぱい、やっと終わり、数日ぶりに一八八センチ反射望遠鏡は元の居場所に戻ったところだった。

神経を使う作業がやっと終わって、一息つきたい気もしたが、所長の話聞いてからゆっくり休めばいい。そう自分を叱咤して所長室へ向かった。

「疲れているのにすまないね。厚生労働省からのお達しだからこちらも早急に動かなくちゃいけないもんだから」

来客用の椅子を僕に勧めながら、所長は困ったように言った。予想外の単語に僕も困惑する。

「厚生労働省……ですか？」

「そうなんだよ。一週間ほど前に厚生労働省からお知らせが来てね。急な話だから私も事情がよく飲み込めないでいたんだけど、すぐに国立天文台からも詳しいプランの資料が送られてきてね。厚生労働省は再来年度から自殺者を減らすための施策をいろいろと行おうらしいんだ。それに国立天文台も協力することになったらしい」

ますます訳が分からない、という顔をした僕に資料の束を渡しながらか、取り敢えず橋口君も資料に目を通して、と所長は言った。

資料にはまず、今の日本の状況が書かれていた。長年の不況によってここ数年の合計特殊出生率は下がりに続け、ついに今年度は1.07まで低下するという過去最悪の事態に陥っている。加えて、高齢者が人口に占める割合は今年度で約27パーセントになっているようだ。

それらをもとに、厚生労働省は以前から行っている子育て支援などの強化や、定年になってもまだまだ元気なお年寄りのための職場確保

を計画しているらしい。ここまでは今までも政府が取り組んできたことだし、国立天文台が関与できそうなことは無い。

どうやら、厚生労働省は新たな問題に目を向けたようだ。

根本的な問題として、政府は財源確保のためには多くの人に働いてもらわなければならない。けれど今の日本では当分の間働ける人は増えていかない。たとえ今すぐ少子化対策が功を奏したとしても、それによって生まれた子どもたちが働くようになるのは十数年先のことだ。じゃあこの状況で他にしなければならぬことは何か。

それは今いる生産年齢人口をなるべく減らさないようにする、ということだ。政府は再来年度から生産年齢人口確保を積極的に進めるつもりらしい。財源確保のため、なんて露骨な言葉は書いてなかったけれど、おそらくそういうことだろう。

具体的に何をするのか。資料の次のページをめくる。そこには、ちょうど生産年齢にあたるであろう二十歳から五十歳の人々の死因が、多い順に書かれていた。

最も多いのが、うつによる自殺。実に全体の35.6パーセントを占めている。

自殺以下は癌、心疾患、などと続いているが、自殺が飛びぬけて多い。そこまで自殺が多いとは知らなかった。資料を読んでいるだけなのに、なんだか嫌な汗が出てきた。

そこまでが厚生労働省の資料で、厚生労働省はさまざまな理由で心を病んでいる方々をケアし、社会において伸び伸びと活躍していただけるような施策を展開していく方針です、と書いてあるだけだった。

また一ページめくると、国立天文台の作った新たなプロジェクトが提案してあった。

『アストロノミカル・セラピー計画』

ゆつくりと星空を眺めることで、心を病んでいる人たちに安らかな気持ちになってもらう。それを目的として、月に一回程度『星空

遊覧会』を開くことが当面の活動らしい。効果があるようならば規模を拡大したり、他の活動も始めるということだった。

厚労省の要請がどうして天文台に向いたのか、やっと僕の中で繋がった。

「なるほど……」

「状況は把握してもらえただろうか」

「はい。……それにしても、施策が回りくどいとか何というか」

「うん、確かにねえ。まあ政府も必死なんだよ。こういう時、国立の機関は国に使われるね。国立に限らず図書館とか美術館とか、公施設はみんなこの取り組みに駆り出されてるみたいだよ」

あんまり詳しくは知らないけど、と所長は笑った。岡山天体物理観測所は東京の三鷹市にある国立天文台の付属施設だから、国立天文台がやると言ったら僕らも取り組まなければならない。

所長は急に真面目な顔になって、今日橋口君を呼んだのは、と切り出した。

「岡山観測所におけるこの企画の責任者を頼みたいんだ」

資料に目を通してある段階で、まあそういうことだろうと予測はしていた。

「もちろん今ここで決めてくれ、なんて言うつもりはないよ。本格的に動き出すのはもう少し先になるだろうし。だけど三カ月以内に代表者を決めて三鷹のほうに連絡しないといけないからさ。どうしても辞退する、っていうなら早めに言ってくれと助かる」

所長は乗り出していた体をどっかりと椅子に沈めて、腕組みをしながら僕を眺める。

「一週間考えて、私は君にお願いしようと思ったんだ。ここの職員の中で一番責任者に向いてると思うよ」

是非とも引き受ける方向で検討してくれ、と最後にもう一度念を

押されて、僕は分かりました、考えてみます、と言うしかなかった。

所長室を出てから、どっと疲れが出た。正直、『アストロノミカル・セラピー計画』とやらの責任者にはなりたくなかった。そもそも責任者というタイプではないし、自分がそのプロジェクトに参加したら、今している研究はどうなるんだろう。僕の研究はやめろということなんだろうか。

所長はなんで僕なんかを選んだのか分からない。「向いている」なんてどこを評価したらそんな結論になるんだろう。とにかく無理だ。僕には向いていない。

冷静さを欠いている自分に気づき、もう少し頭が冷えてからまた考えよう、と思った。今はだめだ。脳が疲れている。

僕は机の上を片付けるのを断念して、今日はもう帰ることにした。

仕事を終えて帰る途中、ふと足を止めて夜空を見上げた。今、雨は降っていない。黒々とした雲があちこちに浮いているのが月明かりではつきり見える。

研究対象という概念を取り払って眺めていると、そこはどこまでもただの空だった。雲の間から星空が見える。こうやって身ひとつで晒されてみれば宇宙の深さを実感する。広さじゃない、遠さでもない。宇宙の深さだ。深い深い宇宙が僕に浸み込んでくる。

しばらく夜空眺めてから足元に視線を落とすと、一匹の猫がいるのに気づいた。人間慣れしているようで、全く物怖じせずひたひたと僕の方に向かってくる。

そいつは少し離れたところである、と座り込み、毛繕いを始めた。しばらく悠々と背中を舐めていたが、途中で少し毛繕いをやめ

てちら、と僕に一瞥をくれてから、まるで興味を失ったかのようにまた毛繕いに没頭し始めた。

その姿があまりにも優雅でつい見惚れてしまったことと、その姿がなんだか宇宙に似ていたことが悔しい。僕は猫の目が嫌いだけど、今一瞬僕の方を向いたその瞳はどこまでも深く、満天の星空に独りで晒されているあの感覚を彷彿とさせた。そしてその瞳がすぐに逸らされてしまったことは、宇宙の謎を解き明かそうともがく僕ら人間なんかには目もくれずに物凄いスピードで膨張し、手の届かないところで消滅し、途方もない時間を超えていく宇宙のつれなさにそっくりだと思った。そして僕は、そんな宇宙の前で呆然とするし、そんな宇宙に似た猫の前でも呆然としてしまう。

思いもかけず猫が宇宙の真理に近いような存在に思えてしまったことを認めたくなくて、君らだって闇がなければ生きていけないくせに何を勝ち誇っているんだ、と悔し紛れに心の中で呟いた。

その悔し紛れが聞こえたんだらうか。目の前の猫はぴくり、と動きを止めて僕を見上げた後、僕に向かって「にゃあ」と言った。それは口角を釣り上げて、僕を嘲笑っているかのように見えた。

毛繕いは終わったようで、そのままゆつくりと僕の前を通り過ぎ、隣の扉をひらりと越えて猫は見えなくなる。

僕は慥然とそれを見送った。今し方姿を消したそいつはどこまで僕を見下しているようで面白くない。

けれど僕は、諦めて素直に負けを認めることにした。所詮夜は猫のものなのだ。夜を休息の時間にして、ただ昼が来るのを待つだけの動物として生きていくことを決めてしまった人類は、夜の間はどうしたって猫に敵わない。

そう納得して、僕は家までの道を再び歩き始めた。

週末、久しぶりに同僚である白坂と酒を飲んだ。梅雨の時期は星空の観測がなかなかできなくなるから、僕ら研究者は時間に余裕ができる。とはいっても、観測以外にも仕事はたくさんあるから、こうして同じ日に暇があつて飲みに行けるとするのは本当に久々だった。

天文台職員が毎日毎日星空を眺めているわけではない。実際観測を行うのは一月の中で一週間ほどのものだ。その他は観測機器の開発や学会への参加、子どもたちに向けての講演会などに追われている。

街中の居酒屋に行く。雨だというのに客は多い。客は多かったが、僕らはちようど帰ろうとしていた人たちと入れ違いですんなり席に着くことができた。

がやがやとした喧噪の中で、僕らが話すのは専ら自分たちの研究の話ばかりだった。ついたてを隔てた向こう側からは、だいぶ酔った風の若い男が上司の文句を言うのが時折聞こえてくる。

僕らは昔からほとんど愚痴を言うことがない。それはいいことなのだろうが、せつかくゆつくり語り合う時間があるというのに、日々研究ばかりしている僕らは生憎その時間を埋めるだけの話題を持ち合わせていなかった。途切れがちな会話の合間に、隣りから聞こえる愚痴が入ってくる。

白坂がふつ、と笑った。

「俺たちの話題には出てこないなあ、そういうの」

「どうやら同じことを考えていたらしい。僕も笑って領いた。」

「高校時代とか、何の話してたっけ？」

「さあ……勉強の話、がほとんどだったんじゃないかな。解いた問題の答え合わせとか」

「してたな、そういえば」

僕らはどちらも黙りこむ。昔のことを思い出そうとしてみたけど、何にも浮かんでこなかった。

そこでふと、『アストロノミカル・セラピー計画』のことを相談してみようと思った

話は変わるけどさ、と僕はプロジェクトの説明をする。

「……っていうのを再来年からするらしいんだけど、その責任者をしてくれ、って言われたんだ」

白坂は顎をさすりながら言った。

「お上も色々考えるな。でも、実際そんなにうちの負担にはならないんじゃないか？ 要するに、特観の回数を増やすってことだろ」

僕らの観測所では、年に二回、特別観望会というのを開催している。開館時間外に特別に催すもので、普段は公開していない一八八センチ反射望遠鏡のドーム内を見学できるようにしたり、その望遠鏡を使ってみんながよく知っているような天体を見ることができるようにしたものだ。

「いや、よくよく考えてみると結構無理がある企画だよ」

時期によって見える天体というのは決まっているし、様々な研究機関が同じ望遠鏡を使おうとするのだ。観測は効率よく進める必要がある。僕らは各研究グループの観測スケジュールを半年ごとに作成し、なんとか共同研究などに支障をきたさないようにしている。そんな中で特観を月一で開催するように、と言われてもなかなか簡単にはいかないのだ。

それに、と僕は言いかけてためらった。

観測スケジュールの調整が大変だというのは本当だ。でもそれは僕の中で建前にすぎないことを僕はよく知っている。

本音は別のところにある。それを言葉にするのをためらった。

白坂は察しがいい。僕が話したくないことを口にしようとしてい

ることに気がついて、聞き返したりしてこなかった。

「そうだな、なかなか一筋縄にはいかないかもな。まあ、まだ決まなくていいんだろ？ 自分の研究との兼ね合いもあるしさ」

でも所長から直々に頼まれたら、なんかもう確定事項で拒否権無し、って感じだよな、と白坂は同情するように力なく笑った。

そういえば俺もお前に言おうと思ってたことがあったんだ、としばらくしてから白坂が思い出したように言った。

「うちに猫がいるって話、したことあるっけ？」

「いや、初耳だよ」

「うちのかみさんが猫好きでさ」

「静恵さん？」

「そうそう。山崎一家はみんな猫好きなんだよ。で、今の家でも飼いたいって言うから一匹いるんだ。メイっていう猫が」

白坂は少し残っていたビールを飲み干す。

「実は今年の夏に沖繩に家族旅行に行くんだ。一週間ぐらい。で、その間猫の世話を誰かに頼もうと思ってるんだけどさ。もし迷惑じゃなかったら、お前のところで預かってもらえないだろうか」

「あー……」

僕は曖昧な声を出した。

「残念ながら、猫はあんまり、好きじゃない、んだ。申し訳ない、力になれなくて」

僕がすごく恐縮してるのを見て白坂は、そんなに気にしないでくれ、多分静恵の実家に連れて行くだろうからさ、と笑った。

そしてポケットから煙草を取り出して火を点け、知らなかったな、と言った。

「猫嫌いだっただのかー。それこそアレルギーとかだったっけ？ あ、犬派なのか？」

「ん、まあどちらかといえば犬のほうが好きだけど…そうじゃなくて、ちょっと」

そこで僕はふと、猫の目が好きではないという話をしてみようという気になった。

白坂は僕の自信なき気な、訥々とした話をじっと聞いてくれた。

僕が話終わると、白坂は確認するように言った。

「猫が夜を吸い込んで昼を作ってる…?」

僕は神妙に頷いた。

「僕はそう思ってるんだ」

白坂は吸っていた煙草を一度大きく吐き出して、しばらく黙ってから僕をまじまじと見つめた。

「天文台で働きながらよくそんな発想が生まれるな」

もう一度煙草をくわえて煙を吐き出して、それから彼は愉快そうにふっと吹き出した。

「でも面白いかもな」

猫が昼を作っているなんて科学者らしからぬことを考えていると知られたら、仕事疲れで僕が現実逃避しているのだと受け取られるかもしれない。

ただ高校以来の友人である彼は、僕の予想を裏切って寛容に受け止めてくれていたみたいだった。白坂がどんな反応をするか密かに心配していた僕は脱力した。

そして白坂はなるほどね、と頷きながら煙草の灰を落とした。

「でも昼と夜の仕組みは知ってるだろ? 俺だったら、科学的な知識が邪魔してそんな面白い発想できないよ」

彼は僕のとんでもない発想を批判するどころか、感心しているようだった。そういう突拍子もないひらめきは新しい発見のために必要な場合もある。今まで正しいと思っていたことが実は違うという

ことが歴史の中でも繰り返されてきた。

でも僕の場合は少し違う。僕は時々感じる感覚のことを素直に吐露した。

「新しい発想とかそういうつもりじゃないんだ。ただ…僕は頭の中の科学と目の前の現象がどうしても結びつかない時がある」

僕だっておかしいと思う。昼を作っているのは太陽だ。地球は真っ暗な宇宙の中で太陽に照らされているにすぎない。

でも、猫を目の前にするとやっぱりこいつの作業なんじゃないか、と思う自分がある。

理論は分かっている。仕組みが説明できる。けどなんだか言葉と事象が全然違う次元で起きているような、そんな断絶されたもののように感じて、うまくまとまらない時がある。

理論や科学を信じないわけじゃない。きつと、科学なんて人間の身の丈には合わない高度な領域にまで手を出してしまっているから膨大な知識を前に自分ひとりで收拾をつけるなんてことができないのだろうと僕は思っている。特に僕は不器用な人間だから、いちいち困惑してしまうんだろう。

僕は再び心配になる。この感覚が、果たして器用な友人に伝わるんだろうか。

しかし彼は彼なりに僕の言葉を消化してくれたらしい。

「俺はあんまりそういうこと考えたことないから、橋口の話が全部理解できたわけじゃないと思うけど…あれかな、絶対タネと仕掛けがある、っていうのは分かっているのに、ものすごい手品を見たときに人間業じゃない、って思うような感じ」

なんか少し違うような気もするけれど、面白い例えだったからつい笑ってしまった。

「お前は思わないか? 俺はたまに、手品師のフリした魔法使いが、手品と銘打ってホントに魔法使ってるんじゃないかと思う」

むきになって大真面目にそんなことを言う白坂のことを笑っているのかは分からなかったけれど、僕はどうしても笑いをこらえることができなかった。

興が乗ってきて、白坂はじゃあこれから俺の家で飲もう、と誘ってくれた。

「嫁さんに迷惑じゃないかな」

「大丈夫だよ。家を出るときに後からうちに呼ぶかもしれない、って言うておいたし」

彼がそう言うのならいいだろう。久々に飲んだというのもあって、このままお開きにしてしまうのは内心少し残念な気もしていた。

でも、さっきの話によると、白坂の家には猫がいる。

なおも躊躇する僕を見て彼は思い当たったらしい。

「猫か……やっぱりだめか？」

僕はいや、とかぶりを振った。変な理由で猫が苦手な僕のことを白坂が心底心配するのがおかしくて、小さく苦笑をしながらお邪魔させてもらうよ、と言った。

外に出ると、雨はさつきより強くなっていた。僕らは靴の中に染み込んでくる雨水に閉口しながら白坂家へと向かった。

「ただいまあ」

「おかえりなさい。あ、いらつしやい。ご無沙汰しております」

「お久しぶりです。すみません、急にお邪魔してしまつて」

「いいんですよ。うちの人が家で飲むのが好きなんですから、よく他の人も来られますし。何もありませんけどゆっくりしていただいて下さいね」

そうやって細君である静恵さんとあいさつを交わしていると、奥の方からドタバタと足音が聞こえてきた。

「パパおかえりなさい」

「おかえりなさい」

「ただいま。優輝も星良もまだ起きてたのか？ ほら、ごあいさつ」

彼は足元にまわりついてくる子どもたちを宥め、僕の方を向かせた。

「こんばんはっ」

「こんばんはっ」

「はい、今晚は。えらいね」

兄妹はうふふふ、と恥ずかしそうに笑って、そのあとときやあきやあ言いながらまた奥の部屋へ走って行った。

「騒がしくて悪いな」

「どうってことないよ。素直でいい子たちだ」

僕の言葉に、やんちゃすぎるときもあるけどな、と彼は父親の顔で笑った。

リビングで焼酎を飲み交わしていると度々兄妹がやってきて、何かしらしてはまた奥に引込む、ということを繰り返していた。

「あなたたち、いい加減に寝なさい」

「ねむくないもーん」

「ねむくない」

二人は静恵さんの言うことを一向に聞こうとせず、星良ちゃんがまた何か僕のところへ持って来て座り込んだ。

「はい、これかしてあげる」

「ん？ ありがとう、今度は何かな？」

星良ちゃんの差し出したものを受け取る。

「せいらのたからものー」

手のひらを見ると、ピンク色の珠が乗っていた。白色の帯が一本入

っている。

「お、きれいだね。誕生石、とかなのかな？ ごめんね、おじちゃんよく知らないんだ」

「せいらわかるよ！ これはね、これはー、きゃつつあい！」

「キャツ・アイかあ。うんうん、聞いたことあるような気がするよ。」

星良ちゃんはこういうの好きなの？」

「うん、だいすきー。きれいでしょ？ せいらほかにももってるんだよー」

「でも一番ピンク色が好きなんだもんな、星良は。宝物だから、っていっつもお父さんに貸してくれないだろー。おじちゃんに貸していいのーか？」

白坂が星良ちゃんを膝の上に抱き上げながらからかうように言う。

「うん、いいのー。おじちゃんはいいひとだから。でもせいらにちやんとかえしてね、かしてあげただけだからね」

急に心配になったのか、何度も念を押してくる星良ちゃんに大丈夫、ちゃんと返すからね、と言っていると、今度は優輝くんが昆虫図鑑を持ってきて僕の隣に座った。

「みてみて、これしってる？」

「トンボだねー。こんなトンボ初めて見たよ」

「これはルリボシヤンマ！ こっちはマユタテアカネだよ。おじちゃんはなにがすき？」

「おじちゃんはギンヤンマと赤トンボぐらいしか知らないな」

「ぼくいっぱいしってるよ！」

すごいねえ、トンボ好きなんだー、と感心してみせると優輝くんは嬉しそうに頷いてまたトンボの説明を始めた。

ゆっくりできないでしょう、と困ったように子どもたちを宥めて寝かしつけようとする静恵さんにいいんですよ、と言いながら子どもたちの相手をする。しきりに話しかけてくる二人に相槌を打ちな

がら酒を酌み交わしていると、遠くでゴロゴロと雷の音が聞こえたような気がした。星良ちゃんが不安そうに白坂を見上げて言う。

「おとうさん、かみなりなつたよ」

「ん？ そうかー？ お父さん聞こえなかったよ」

「うん、僕も鳴ったと思った」

ね、と僕は頷き合う。そして星良ちゃんはおもむろに白坂の膝から降り、静恵さんに向かってだっこ、というように両手を伸ばした。

「せいら、ねる。せいらがねないから、かみさまがおこってる」

あらあら、と静恵さんは微笑んで星良ちゃんを抱き上げた。

「そうね、神様が怒ってるのかもね。星良はいい子だからもうねんねしようか。ほら、おじちゃんにおやすみなさいして」

母親に抱かれて安心したのだろうか、さつきまであんなに活発だったのにもう眠そうな顔をしている。

「おやすみなさい」

「うん、おやすみなさい。またね、星良ちゃん」

とろんとした目でばいばい、と手を振る星良ちゃんは母親に抱かれて奥の部屋へと引つ込んだ。

「優輝は寝ないのか？ 神様怒ってるぞ」

白坂が優輝くんを小突く。小突かれた額を抑えてけらけらと笑ってから、優輝くんは自信たっぷりに言った。

「ねないもーん。それに、かみさまなんていないんだよ？ かみなりがなるのはねー、くもとじめんのあいだにでんきがながれてね、『しんどう』がおきてね、それでゴロゴロいうんだ」

果たして今の説明で雷の仕組みを全く知らない人が納得できるかは分からないけれど、少なくとも僕はちゃんと仕組みを知っているし、六歳児にはよく説明できていると思った。

「よく知ってるねー。優輝くんは物知りさんだな」

さっきのトンボの知識といい、今の雷の説明といい、自然科学に興味があるんだろうか。研究者に向いているかもな、血がそうさせるのか、と思いを巡らせていると、白坂が見透かしたように言った。

「いつとくけど俺が教えたわけじゃないからな」

「え？ 違うのか？」

「今聞いて俺もびっくりしたよ。優輝ー、雷の仕組みなんてどこで知ったんだ？」

知らないうちに賢くなったなあ、と頬を緩ませながら優輝くんの頭をわしやわしやと撫でる白坂は、親馬鹿全開だった。

奥の部屋から静恵さんが出てきて、微笑みながら優輝くんの横に座った。

「優輝は自分で色んなこと調べるおりこうさんだもんね。でもおりこうさんは夜更かししないのよ」

お母さんに頭を優しく撫でられながら、優輝くんはちよつとほっぺをふくらませていたが。

「……ねる」

そう言つて、お母さんに抱きついた。

「いい子ね。じゃあ優輝もおじちゃんにおやすみなさいして」

「おやすみなさい。またきてね、ぜったいだよ」

そんなに気に入ってもらえたんだろうか。僕が分かった、また来るよ、と言うと、満足げに静恵さんを振り仰いだ。

「おとうさんもおやすみなさい」

「ん。おやすみ」

子どもたちが寝静まると、部屋は一気に静かになった。

「ふー。やつと静かになった」

白坂が伸びをする。

部屋が静かになったからだろうか。今まで全く姿を見せなかった猫が、どこからともなく現れた。

何の音も立てずに部屋中を歩き回る。そして部屋の端の方で座り込むと、真っ直ぐに僕を見つめてきた。しばらくじつとこつちを見つめた後、ふいつ、と目を逸らす。

よく分からないけれど何か見透かされているようで、僕は落ち着かなかつた。

白坂家にお邪魔してから、だいぶ日にちが過ぎた。梅雨が終わって本格的な夏が来る。

そんな時、白坂から一緒に花火をしよう、と誘われた。

「子どもたちが、『ちゃんとおじちゃんも誘つて』って言うからさ。時間があるなら来てくれないか」

少し躊躇した。やはり白坂家には猫がいる。

だけどやっぱり行くことにした。

というのも、白坂家にお邪魔した後、家に帰ってから何の気無しにジャケットのポケットに手を入れたら、あれほど『かえしてね』と言われていたキャッツ・アイが入っているのに気づいたのだ。そういえば星良ちゃんに返した覚えが無い。返しそびれて、そのまま無意識のうちにポケットに入れていたらしい。僕は頭を抱えた。

次の日、白坂に詫びて星良ちゃんに返しておいてもらったけれど、僕からもちゃんと謝ろうと思っていた。僕はお詫びとして、お菓子を買って白坂家へ向かった。

花火に誘われたといっても、主役は当然子どもたちだ。僕と白坂は発泡酒の缶を片手に色とりどりの光を少し離れたところから眺める。

「あらかた花火は終わったところで優輝くんが線香花火を取り出してきた。」

「いつぽんあげる。ゆうきときようそうね〜？さいごまでひかっけたほうのちかち！」

しゃがみ込みながらいきなり宣戦布告される。線香花火なんて何年振りだろう。導火線をそっと火に近付けると、導火線はチリチリと燃えてオレンジ色の丸い光の玉を作った。

「おじちゃん、ぼくがかつたらおじちゃんのスイカもらうからね」

「お、じゃあスイカとられないように頑張らないとな」

優輝くんは線香花火を握りしめ、じいっと火の玉を見つめている。本人は揺らさないように精一杯気をつけているつもりなのだろうけれど、導火線の先は危なっかしげにゆらゆらと揺れている。

そのうち、パシッ、パシッと火花が飛び始めた。星良ちゃんがタタッ、と走り寄って優輝くんの横にすとん、と座り込む。

「きれいだねー。おにいちゃん、せいらもはなび」

「まって。いまいそがしい」

火花を凝視したまま優輝くんは妹の言葉を一蹴した。最初激しかった火花が少しずつ小さくなっていく。僕らふたりはいい勝負だった。

「いそがしい」と兄につれなくされた星良ちゃんをちら、と見る。

自分も線香花火がしたいともっと大騒ぎするかと思いきや、彼女は兄の言葉通りおとなしく座って勝負の行方を見守っていた。どうしても線香花火がしたければ両親にでも言えばいいだろう。それでも兄にくっついてちゃんと待っているというのが微笑ましくなつて、ついふっ、と笑ってしまった。

「あ」

「あ」

笑った振動で、僕の火の玉がぼたりと落ちた。

「あーっ」

「まいったな。おじちゃんの負けです」

僕は苦笑して敗北を認めた。優輝くんは得意げに笑って僕に駄目出しする。

「もー、おじちゃんなんでとちゅうでわらったりするのー。せんこうはなびのときはうごいちやだめじゃん」

「ははは、そうだねえ。今度線香花火するときは気をつけるよ」

優輝くんは満足げに僕を見て、それから小さく小さくなつてもなお微かに火花を散らし続ける自分の線香花火を見つめる。

「それにしても優輝くんの線香花火はいつまでももつね」

僕も星良ちゃんもその小さな光と一緒に見つめた。とうとう火花は出なくなり、残ったオレンジ色の光もすうっ、と消えていった。

自然と僕らの口からはほう、とかはあ、とか感嘆とも落胆ともつかない溜息がこぼれる。

「よし、じゃあ次は星良ちゃんも線香花火しようか」

うん、と頷いた彼女に線香花火を持たせ、火をつけるのを手伝う。

今度は二本まとめてやるんだー、と言う優輝くんと星良ちゃんと僕と三人で線香花火を再開する。僕らは火を点け、火花を散らし、やがて消えていく線香花火を飽きもせず何度か何度か繰り返して、それぞれの一部始終に一喜一憂した。

線香花火は太陽のような恒星の一生に似ていて、その様子を見つめる僕らはまるで、その恒星の一生を見ようと望遠鏡を覗き込む天文学者のようだった。

花火が終わった後、僕と白坂は公園でそのまま晩酌することにした。今日はしゃぎ疲れたのか、子どもたちはあっさりと家に帰り、今頃は静恵さんが寝かしているんだろう。

僕らは何を話すでもなく、ちびちびと酒を飲んでた。

将来のこととか恋愛に関する話、人間関係の話や自分の内面のこと。高校生の頃から仲が良かったのに、そういう話を白坂とした覚えはほとんどない。そんなことでよく会話と友情が続いたもんだ、と僕は今更ながら不思議に思った。

「白坂」

「ん？」

「僕と一緒にいて退屈じゃないか」

白坂はきよんとした後、吹き出した。

「なんだその子どもみたいな心配事は。今更そんなこと聞くなよ」

退屈なんてしてない、なんでそんなこと言い出すんだ、と彼は可笑しそうに尋ねる。

「だって僕らって会話が続かないだろ。僕は面白い話題なんて持ち合わせてないんだ」

確かに言ったあとで我ながら青臭い質問だったな、と思っていたから、僕は恥ずかしさをごまかすように慌てて言った。

僕の恥ずかしさも、その恥ずかしさをごまかそうとしたことも全部お見通しの白坂は、まあ確かに会話は続かないけどな、と苦笑して、でも、と少し真面目な顔をした。

「喋って間合いを埋めることがそんなに重要か？ 喋りたくないときに喋らなくても気まずくない友人のほうがよっぽど重要だと思うけど」

虚を衝かれて押し黙る。白坂がそんなことを言うとは思っていなかった。いや待て、それはあくまで僕のイメージに過ぎないだろう、と我に返って自分を窺める。

僕はぼんやりと白坂を見た。そうだ、僕は白坂のことを殆ど知らない。

高校一年の入学式、僕は白坂に話しかけられた。

「すいません。B棟ってというのが分からないんですけど、どれのことか分かりますか？」

ああ、僕もB棟行きますから一緒に行きましょう、と応じた。よく話を聞いてみると、僕は同じクラスだった。

それ以来、なんだかよく一緒にいるようになった。部活も違ったし、積極的に話したりするわけではなかったけれど、結局三年間同じクラスだった。そして大人になった今でも、同じ職場にいる。

それなのに、僕らは何も語り合っただけじゃなかった。

白坂は聡い。言わなくてもおおよそ僕の心情が分かっているんじゃないだろうか。そんなことを思わせるような発言を絶妙なタイミングでしてくる。

この前の話の中で出てきたたとえ話。手品師のふりをしている魔法使い。

魔法使いはお前じゃないのか、白坂。普通の人間みたいなふりをした魔法使い。

自分のことを話さなくても分かってくれている気がしていたから、それに甘えてきた。それに甘えて、自分の意思を示すことも、他人のことを考えるのもさぼってしまった。

今更になって、存在感の無い、存在を主張しない自分が不安になる。

「そういうえば、なんとかセラピーの責任者の話はあれからどうなった？」

僕はああ、やっぱり、と思う。どうして僕が話したいけど話すタイミングを掴めなかった話題をこんなに鮮やかに持ち出してくれるんだろう。

下を向いてしばらく押し黙った後、僕は絞り出すように本音のか

けらをこぼした。

「分からない。最近、宇宙のことがよく分からないよ」

白坂は察しがいい。脈略のない今の発言だけで、僕のパンドラの箱をあつさりを見透かす。そして僕の中で明確になっていないものもやとしたものを、要領よく、時には残酷なほどの確に、言葉として具現化する。

「もしかして、研究職をやめたいと思ってるのか？」

言葉にされると、ひるむ。

でも、今はまだ。下を向いたまま、ぎゅつとこぶしを握る。

言葉として具現化されても、気持ち揺らがなかった。

「やめたい、とは思ってない。まだ続けたいと思ってるよ」

僕がセラピーの責任者になるのをこれほど悩んでいるのは、もう自分の研究が続けられなくなるかもしれない、と思うからだ。自分の研究をやめてもいいと思っている研究者なんてそうそういない。だから、所長にはちゃんと断ろうと思っていた。

けれど、あることに気づいてしまった。

僕は一体何が知りたかったんだ？

僕は昔から、夜空を眺めるのが好きだった。あまり小さい頃のこととは覚えていないけれど、夜空にまつわることは比較的よく覚えている。

「見てごらん。お星様がいっぱいだよ」

母親の声と、数え切れないほどの星々。確か、星空に関する記憶の中で一番幼い時のものだ。その光景だけはやけにはつきりと思いつくことができる。

小学二年生の夏、家族でロケット発射台のある島へ旅行に行ったことがあった。残念ながら見学したはずの発射台や宇宙科学館の記憶はないけれど、一泊した夜に街の郊外で見た夜空のことは今でも

覚えている。

きっと新月の日だったんだろう。余計な光は全くなく、見上げた視界は天の川がほとんどを占めていた。名も無いような星屑がそれぞれ光を放って、真っ黒なはずの空を深い藍色に染めていた。無数の銀色がさざめいているように、ちかちかと光って見える。僕はその星空に圧倒された。

本当に、降ってきそうなほど近くに星が見えたのは何故なんだろう。この時以来星空に興味を持つようになった。

星空を見るとわくわくする。光っているあの「星」って何なんだろう。それが知りたいと思っていた。

中学、高校と勉強をしていくうちに、星空の仕組みや成り立ちが分かってきた、と思うようになった。けど大学、研究職、と更に進むと、今度はだんだん分からなくなっていく。

知識が増えていく。増えていくけれど。

星空のことが分からない。

僕は僕の憧れた星空から遠ざかってしまって、迷子になった。

多分、僕は星空のことが知りたかったんじゃない。あの日見たあの夜空に近付きたかったんだ。

物思いにふけていた頭を上げると、傍らに猫が座っていた。

僕は自然とそばに座っていた猫にそっと手を伸ばす。一瞬猫は引こうとしたが、僕がそれ以上近付いてこないのをじっと見つめた後、ゆっくりと猫のほうから近付いてきた。

猫は伸ばした手に頬を擦り付ける。そのまま少し頭を撫でてみると、何か言いたげに僕を見上げてきた。ひたすらに黒を塗り込めたような瞳孔が僕の方を向いている。

僕はそこから目を逸らさず、ゆっくりと猫を抱き上げた。猫も僕から目を逸らさない。

猫の両脇を抱えあげて、顔の高さまで抱き上げると、僕は猫の眼を真正面から見つめた。

瞳の中に、夜を視る。

真っ黒だった。真っ暗ではなかった。そこに宇宙の神秘なんて潜んでいなかった。ただ、やけに思いつめた表情をした僕の顔が映っているだけだった。

なんだか自分の目指している方向に向かっていない気がしていた。でもそもそも自分が何を目指したのかも自分で分からなかった。目指しているものが無いわけではなかったはずだ。それなのに僕は自分と向き合うのを避け、いつの間にか何がしたかったのかを曖昧にしてしまっていた。

でも、今やっと分かった気がした。思い出した。

何もかも見透かすような猫の瞳でも、もう嫌だとは思わなかった。猫を抱き上げた僕を驚いたような顔で見つめている白坂に向かって、僕は心の底から爽やかな笑みを浮かべた。

「研究を続けたい。所長にちゃんと試みてみるよ」

(法学部法学科一年)

第二回東光原文学賞優秀賞受賞作品

ふじょうのこども、幸福な花。

田中 ちひろ

清潔な光に満ちた廊下で、柔らかな生き物を抱いていた。

作品展に出品するイラストのことを考えていたのだ。使う画材、構成、テーマ。そんなことを考えながら、何となく、掲示板に張られたポスターを眺めていた。『妊娠中の喫煙は胎児に悪影響を及ぼします』。初代ちゃんは煙草なんて吸わないんだけどなあ。ところで、やっぱりアクリルガッシュでどうだろう。こう、ビビットな感じの配色で。

きつと、そんな私の姿が、ずいぶん暇そうに見えたのだと思う。ポスターの前に突っ立っていたのもいけなかったかもしれない。

「すみません」

声を掛けられて振り向いたら、そこには乳児を抱えた若い女性が立っていた。

「トイレに行きたいんです。少しだけこの子を見てもらえますか？」

そういうわけで私は現在、この柔らかな生き物を両手に抱えて、長椅子に座っている。

産婦人科の待合室は、赤ん坊の泣き声と、母親達のひそひそとした話声、それから訳の分からない希望のにおいであふれている。そ

んな雰囲気は理由も無く居たたまれないから、私はこの場所があんまり好きじゃなくて、いつもはすぐ二階の病室に向かう。

腕の中の赤ん坊は、自分の母親が二十一の小娘にすり替えられたのにも気づかない様子で、静かに眠っていた。小さくて、極端に繊細そうなこの生き物には、温度があつて、そして思ったより重さがあつた。私は二人姉妹の下だったから、赤ん坊なんて抱いたことが無くて、そういった当たり前のことに驚いていた。柔らかくて、暖かくて、重たいこの生き物。ああ、どうか起きてしまいませんように。

目を覚ましたらどうしよう、とひやひやしていた所に、やっと母親が帰ってきて、私は爆弾か何かを扱うみたいに、慌てて赤ん坊を彼女に返して、逃げるようにその場を後にした。

この病院は、一階が外来で、二階が入院患者用のフロアになっている。

患者、と言っても、入院している人のほとんどは出産前後の女性で、病室からは夫婦の話声や赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。優し

そんな顔の看護師、白衣の女医、見舞客風の花束を抱えた女性などと次々すれ違って、廊下を奥へ奥へ、と進んでいく。病室のドアの横に取り付けられたプレートを見ながら、206号室、207号室、208号室。

209号室、中村初代。

「初代ちゃん」

病室を覗いて、声を掛けると、窓の外を眺めていた初代ちゃんは、優雅な動作で振り返った。

「クリエイティブな事がしたい訳よ」と深夜のファミリーレストラ
ンで、漠然とした夢を語ることが、一体何歳まで許されるのか分
らないが、私はクリエイティブな事がしたい訳である。

そういう訳で、両親亡きあと美術系の専門学校を出て、イラスト
レーターを名乗ってみるも、そういう簡単に仕事など来ないので、
とりあえずコンビニアルバイトと両親の遺産で生活している。要す
るに、私はあまりきちんとしたタイプの間人ではない。

対して初代ちゃんの人生設計はほぼ完璧で、幼いころから成績優
秀で、高校進学後、総合病院がスポンサーの奨学金の枠を獲得して、
さらに看護学校に進学した。手に職である。非常に堅実な生き方
である。看護学校を卒業後、スポンサーであった総合病院の看護師と
して働いていて、今は産休を取っている。

みなしごにしては、自立していて、なかなか立派な人生である
と思う。

そんなほぼ完璧で堅実な彼女の人生の中で、一人で子どもを産ん
で育てるといふ選択は、多少突拍子もないように思われた。その選
択が正しかったか間違っていたかは別にして。それに選択が正しか
らうと間違っていたら、今となつてはもう関係ないのだ。

私はベットの横に立て掛けてあるパイプ椅子を広げて座りながら、
言った。

「下で、赤ん坊を抱いたよ」

何を、私は何を言っているんだろう、と思った。私はひどい人間
だ、と、それでも何故か止まらなかった。

「すごく、柔らかくて、温かかった」

自分が残酷な事をしていっているという自覚はあった。あったけれど、
そんな風に言つて、初代ちゃんがどんな顔をするか知りたかったの
だと思う。そうして、自分の醜さを呪う。

「そう」

初代ちゃんは、顔色一つ変えずに、短くそう言った。

何故そんな風に平然として居られるの、と、私は思わず言つてし
まいそうになつたけれど、言わなかった。

ところで、美しすぎるものは破滅を招くというのが私の持論であ
る。

それはルーベンスの絵にひきつけられるネロであり、花火を見よ
うとして橋から身を乗り出して川に落ちるアベックであり、中村初
代に恋をしてしまう男達である。

半年ほど前に、交際していた相手と別れた。理由は簡単で、彼が
初代ちゃんを好きになつてしまったからである。「実は、君のお姉さ
んが」と言われて、あまりに腹が立ったので背負い投げてやった。
高校の頃、体育の選択で柔道をやっていたことがあったから、割に
苦労なく投げる事ができた。それきりだ。

しかし、こんなことには、慣れているのだ。

要するに恋人の心を姉に奪われるということに。

なにせ初代ちゃんは美しい。それは動かない事実である。そして私は外見的に言っでごくごく平凡である。それも動かない事実である。

ただ、私は正直で普通の人間なので、このようなことが続いて、この美しい姉を全面的に好きになることができずに、時々意地の悪いことをしてしまうのである。

「じゃあ」と言っ私は、椅子から立ち上がり病室を後にした。

初代ちゃんはやっぱり表情を変えずに、「うん」とだけ言っ軽く手を振っ私を見送った。病室のドアを出る前に、振り向いて個室の中をぐるりと見まわす。初代ちゃんが寝ているベッドの横の、空の新生児用のベッドが目に入った。

時々、広告代理店に勤めている専門学校時代の先輩からイラストの仕事が入る。というより、そのほかにはイラストの仕事はほとんど入らない。

たいていの場合依頼があるのは、CMやポスターなどに使われる大きなイラストではなく、あまり規模の大きくない企業の新聞広告や、チラシなどに使われる、小さいカットである。

まあ、フリーのイラストレーターなんてこんなものさ、と私は少し諦めている。諦めている振りをしながらも、誰かがどこかで私のイラストを目に留めてくれるかもしれないという都合の良い夢を見ながら、十センチ四方の絵に無駄な情熱を注いだりする。そして締切に、ほんの少しだけ遅れたりする。そして、言われるのだ。「つまらない仕事なんだから、そんなに力を入れなくてもいいよ」。言われ

るたびに、私は死んでしまいたくなるのだ。「つまらない仕事だから」？

そんなときに、例の先輩が作品展の話を持ちかけてきた。

「A4くらいの大きさを、パネルを一枚描かない？」

「パネル、ですか」

「そう、若くて実力のあるイラストレーターの合同展の企画があった、知り合いの会社が主催なんだけど」

でも、私、実力なんて、と私が言っ先輩は、「私は君のことを高く買ってるんだよ」と言った。先輩が私を高く買っっていたって、実際に私の絵が高く買われなければ意味がないのだけだ。

「だから、私以外の人間に自分の実力を示すチャンスでしょう」

もう出品枠は確保してあるからね、と先輩は何でもないことのように言った。そういうわけで、最近はおっぱら作品展に出品するイラストについて考えている。

画材は主にアクリルガッシュを使っている。

輪郭のはつきりとしたイラストを描くのに適しているからだ。

私はぼんやりしたイラストは描かない。好きではないのだ。できるだけ無駄のない線で、簡潔に、わかりやすく、大胆な色遣いで。元来いい加減で、万年モラトリアムではあるけれど、一応のところ、自分の作るものに対してこだわりはあるのだ。ポップでモダンに。それがポリシー。ただし、どこの三流イラストレーターも掲げているようなポリシーではあるけれど。

CGはあまり使わない。やり直しが利かない、というのが気に入っているのだ。実質フリーターの癖に、信念だけは立派だな、と思うと晒えてしまう。

少し自虐的な気分になりながら、私はコピー用紙に鉛筆でイラスト

トの下地を書いていく。まだテーマすら決まっていな
鉛筆を動かしながら、私は今日腕に抱いた赤ん坊と、名前のない
子供について考える。

地学を専攻していた大学院生だった。

背負い投げて別れた交際相手のことである。

実際には平凡な私にふさわしく、彼もまた平凡で、真面目で、そ
れでいて学生らしくすこし地に足がついていないところがあって、
どうしようもなく優しい、良い人だった。

私が一週間に一回くらい、自虐的な気持ちになって、死にたい、
と口にするとうチュニジアへ行こう、と言うのが癖だった。

「そんなにづらいなら、つぐみ、僕とチュニジアに逃げようよ」

なぜチュニジアなのかはよく分からない。地学の研究で海外に行
ったりすることもあったみたいだから、実際に行ったことがあるの
かもしれない。でも私は、そもそもチュニジアがどこにあるのかす
ら、分からなかった。ヨーロッパ？南アメリカ？

「アフリカ大陸だよ」

そういつて、彼は笑って、もういいよ、と言った。何が「もうい
い」のか分からなかったけれど、そんな風に言ってもらうと少しだ
け気持が軽くなって、いつでも全部投げ出して、ここじゃない場所
に行けるような気がしていた。でも、それは全面的な冗談で、もし
私が本当にチュニジアに行きたいと言えど、どうしようもなく優し
い彼は困るだろうから、私は、「そんなところ遠くて行けないよ」と
返すのだ。すると彼はほっとしたように、「そうか」と言う。

そんな意味のないやり取りが、今、欲しい、と思ったのだ。パネ
ルと名前のない子供について考えながら。

初代ちゃんの病室を訪れるのが日課である。

訪れて何をするわけでもない、ただ、妹の義務として、一日一回
様子を見に来るだけである。

私が最初に病院から知らせを受けたのは、今から約一週間ほど前
のことである。

「しざんでした」と、受話器は言う。私は思わず繰り返した。

「しざん、ですか？」

相手が、死産、と言っているのに気がつくまで、数分かった。
日常的に、馴染みのない響きだったのだ。

「死産ですか？」

「はい、残念ながら、死産です」

つまり、私の甥か姪にあたる子どもが死んだのだ。

それでも、不思議と、悲しい、とは思えなかった。子どもがひと
り、死んでいたというのに？なぜ？初代ちゃんと大して仲が良く
いから？初代ちゃんは、自分のことは何でも自分で片付けて、私に
相談しないから？

「初代ちゃんは」

「うん」

「なぜ、ひとりで子どもを産もうと思ったの？」

そう聞くと初代ちゃんは、いつものように、首を少しだけ動かし
て、私をまっすぐに見た。額の真ん中で分けられた、真黒な髪の毛
がさらり、と流れて、私はその本物の黒にくぎ付けになる。アクリ
ルガッシュの黒色は有毒。

「思ったんじゃない、決まっていることだから」

美しすぎるものは破滅を招くのだと思う。破滅を招くようなパネ
ルを描かなくては。

「大変、済まないと思っっているんだけど」

と彼は切り出した。その日は雨で、私は、彼の部屋に敷いてある毛足の長いカーペットの上に仰向けに寝転がっていた。

「何？私に謝らないといけないような事をしたの？」

身を起して彼を見ると、まるでがん告知をする医者のような深刻な顔をしていたので、びっくりした。唇を噛みしめて、突っ立っている。半身を起した私の、丁度目線の位置に、固く握られたこぶしが見えて、爪が食い込んで指が白くなっているのがわかった。

「どうしたの、何があったの」

彼は私と眼が合うと、視線を逸らして黙った。雨が地面に叩き付けられる音が、やけに大きく聞こえた。いやな予感がした。美しい姉を持つ妹は、いやな予感に敏感なものだ。それでも、まさか、この人に限って、それは、と思いきもうとしていた。

「つぐみ」

雨の音がうるさいのに、妙にはっきりと聞き取れる。

「いい、言わなくていい、何も言わないで」

「つぐみ、僕は」

「やめて、やめてやめてやめて」

「僕は、実は、君の、お姉さんが」

全部言い終わる前に、チェックのシャツの襟をつかんで背負い投げた。

一瞬の間、関節に染みる重み、それから、だん、という鈍い音がして、彼が上質なカーペットの上にたたきつけられる。

喉が乾いていて、空気が奥のほうでつかえて出てこないような気がした。心臓がやたらと忙しく拍動している。彼を挿んだ手のひらが熱くて、でもからからに乾いていて、握っても握っても力が入らないような気がした。

受け身も取らずにまともに床に体を打ち付けた彼は、静かに涙を流していた。ごめん、つぐみ。そう繰り返しながら、涙をこぼし続けて、こぼれた涙はふかふかのカーペットに吸い込まれていった。

君のことは、とても好きだ、でも、初代さんに、どうしようもなく惹かれるんだ、自分でも、訳が分からないんだけど、こんなことは初めてなんだ、ごめん、つぐみ、あの人の孤独が人を引き寄せてしまうんだ、ごめん。

涙を流しながら、弁明と謝罪を繰り返す恋人を、私は乾燥した瞳で見下ろしていた。涙が出なかったのだ。それから、なんだか全部が滑稽な気がして、笑えて来た。は、ははは、と笑った。はは、ははは、ははは。背負い投げ？なんで役者が私だともうコメディになるのかなあ。涙を流し続ける彼を、ずっと見下ろしていた。私が泣くことができないのは、この人が私の分の涙も流し続けているからだと思いつながら。

「中村さん、ちょっと」

初代ちゃんの病室に行こうとしていたら、廊下で白衣を着た女性に名前を呼ばれて、呼び止められた。

「お姉さんのことだけ」

「はあ」

「仕事に戻るの、まだ無理だって、あなたのほうから説得しておいてくれない？」

「は？」

お姉さん、職場に戻らないと人手が足りなくなってるからって、退院したがついているのよ、と白衣の女性は言った。

仕事、と私は思った。中村初代の堅実な人生、安定した収入、職業、仕事。

「注意しておきます」

そうやって私は、早足で初代ちゃんの病室に向かった。206号室、207号室、208号室。209号室、中村初代。

「初代ちゃん」

初代ちゃんは、いつものように、ベッドの上で体を起して、窓の外を眺めていた。私に気がつくのと、ゆつくりと振り返る。

「初代ちゃん、父親は誰なの」

「え？」

「今どこにいるの」

「つぐみちゃん」

「初代ちゃんにとつて、あの子はなんだつたの」

「なに」

相変わらず、何を言われても顔色一つ変えない初代ちゃんにいらして、肩を押す。すると、もともと細身なのにさらに痩せてしまった体が、何の抵抗もなく倒れてベッドに沈んだ。

「初代ちゃん、あの子が死んで悲しくないの」

肩を押さえたまま、言う。

初代ちゃんが、何も悲しんでいないことについて、どうしようもなく腹が立って仕方がなかった。どうしてだか説明できない。でも、誰にも死を悲しんでもらえない人間がいるということに、理不尽さを感じていた。せめて、母親ぐらいには。

「悲しくないはず、ないじゃん、初代ちゃんの子供だよ、なんで、泣かないの、泣いてあげてよ、ねえ、なんで初代ちゃんはいつもそうなの、嫌いだ、初代ちゃんなんて大嫌いだ、泣いてあげてよ」

「でも、つぐみちゃんが、もう泣いてるじゃない」

言われて、はっとする。自然と涙があふれて、顎を伝って、初代

ちゃんの入院着の上に落ちて染みを作る。なんで私、泣いているの、誰のために。

初代ちゃんの、細い肩を押さえながら、私はぼろぼろと涙をこぼす。中村初代、お前は、そんなじゃなかったはずだ、そんな、精密な丸みために、完璧じゃなかったはず、昔はちゃんと、今よりは笑っていたし、泣いていたじゃないか、いつから、そんなふうになっちゃったんだ、お母さんが死んで、お父さんが後を追ったときから？おばさんの家に預けられたときから？遺産だけじゃ二人分の進学は難しいと知ったときから？

視界の端っこのほうで、初代ちゃんの腕が動くのが見えた。肩を押さえてないほうの腕をのぼして、私の頬に触れて、涙をぬぐう。手が冷たい。

「生きることに」

初代ちゃんが、静かに言う。点滴の管の中に、血液が逆流しているのが見えた。ああ、初代ちゃんの血だって赤いじゃないか。

「生きることに、余計な意味を付けてはいけないよ」

初代ちゃんの乾いた声が、病室の白い壁に溶けてなくなる。私は頬の上で乾いていく涙の筋を感じながら、どうして、とだけ繰り返していた。

チュニジアへ行こうよ、と私は言った。

カーペットの上に仰向けに倒れていた恋人に、ねえ、チュニジアに行こうよ、私と、初代ちゃんなんかやめて、私と、どこかへ逃げようよ。

でもあの人はずっと言ったのだ、「そんなところ遠くていけないよ」。

一瞬、あの人かと思った。

背格好が、似ていたのだ。思わずあの人の名前を呼んだ。でも振り向いた顔は知らない人だった、あの人じゃない。

「中村継美さん？」

「はい」

この人、誰だろう、と思って見ていた。なぜ私の名前を知っているんだろう。

男性が、マンションの、私の部屋のドアの前に立っていたのだ。

青いチェックのシャツとジーンズの、普通の、特徴のない二十代後半くらいの男性。仕事関係の人？でもそんな人が直接私の所にくるのだろうか。

「子どもが、だめだったんだって」

「え？」

まさか、と私は思った。

「初代から、電話が、あったんだ。子どもが、死んだんだって」

「初代ちゃんから？」

そう、と男性はうなずいた。

「中に」

「いや、いい、言うことだけ言ったらすぐ帰るから」

男性はそう言って少し笑った。

「子どもに名前はあった？」

「いいえ、あの」

「うん、初代はリアリストだからね、死んだ子どもに名前なんてつけないだろうなあ」

彼は遠い眼をして、納得したように一人で頷いていた。私は状況がよく飲み込めなくて、何も言うことができなかった。

「名前を、あの子の名前はね」

そう言って、男性は近づいて、そっとその名前を耳打ちした。紫

色の、花の、名前。

それだけ言うとも男性は、初代に伝えて欲しい、と言って私の横をすり抜けて行った。

突然のことに、私は何が何だか分からなくて、マンションの廊下を歩いて行く彼の背中をただぼんやり眺めていた。途中、男性の足がびたり、と止まった。何かを思い出した、というように。

「俺は、これは初代の SOS なんじゃないかと思った」

え、と私は思わず聞き返した。

「俺は、子どものことを、知らなかったんだ。何も知らなかった。だから、電話してきたのは、俺に助けてほしいんじゃないのかなって、思った」

「きつと、そうだと、思います、姉は」

「でも、仮にそうだとして」

俺に何ができるの、と男性は振り向いて、言った。

その顔が今にも泣き出してしまいそうで、私は、あの日、涙を流していたあの人のことを思い出す。思い出して、この人も、美しいものにかかわってふこうになってしまった人の一人なんだな、と思った。

後姿が、廊下の向こうに遠ざかって、階段のほうに消えて見えなくなかった。

私は廊下に立ちつくしたまま、花の名前を繰り返す。子どもの名前。誰にも泣いてもらえない子どもの名前。

行かなくちゃ、と思って、私は走り出した。

通りに出た時に、すでに男性はいなくなっていた。

清潔な光の下で、柔らかな生き物を抱いていた。平和とか、幸せとか、そういうものを形にするとこうなるんじゃないかと、思って

抱いていた。美しいものは破滅を呼ぶけど、可愛らしいものはきつと幸福を呼ぶんだなあ、と思った。なぜその幸福の形を、初代ちゃんが腕に抱くことができなかつたのか私には分からない。もしかしたら相容れないのかもしれない。でも、私は、花の名前を、伝えなければならぬ、今すぐに、たった一人の姉に。

タクシーを降りて、ほとんど走るくらいの早歩きで、まっすぐに病室に向かった。希望のにおいのする待合室を抜けて、二階の病室へ。

「初代ちゃん」

でも病室に初代ちゃんはいない。代わりに、エプロンを付けたおばさんが、ベッドのシーツを整えている。

「この患者さんなら、外の空気を吸いに」

全部聞かずに、私は屋上へと向かう。初代ちゃん、花の名前、それから、あの人のこと。

本当は、投げ飛ばすつもりなんて無かつた。腹が立ったんじやなくて、見放されるのがものすごく悲しかった。だから、その首にすがりつこうとして、すがりついて、私を見捨てないでよ、って言うつもりだった。でもあの人の目があんまり怯えていたから、困らせたらいけないような気がして、背負って投げた。すでに一番大切なものの二つとも捨てられているから、本当は何にも捨てられなくかつた。何かに捨てられるものが許せなかつた、あのこどものように。

スチールのドアを開けて、屋上に出る。

初代ちゃんが、フェンスのそばに立っていた。

「つぐみちゃん」

初代ちゃんは、ゆっくりと振り返って私を見る。

「人は、高いところから落ちたら死ぬんだよ。生とか死っていうのは、たったそれだけの意味なの。余計な意味を付けてはいけない。生きることは、生きることそれだけの意味しかない、分かるでしょう」

飛び降りるの？と私は聞いた。

「飛び降りると思う？」

私は首を振った。初代ちゃんは、そんなことはしない。死にたいと軽口のように繰り返しては、優しい恋人にすぎない私よりも強い人だし、お母さんを追って死んだお父さんよりもリアリストだ。だから、生きることにちようどそれだけの意味しか持たせない。それは正しい、でも。

「初代ちゃん。こどもには名前があつたよ」

初代ちゃんは驚いた眼を向ける。

「死んだこどもに、名前なんて必要ないでしょう」

「でも、初代ちゃんはきつと、こどもに名前が欲しかつたんだ。だから、電話をかけたんだろう、彼に」

一歩、初代ちゃんに近づくと、初代ちゃんは怯えたように後ずさりした。じり、じり、と距離を縮めていく。

フェンスまで追いつめて、腕を掴んで引きよせた。

耳元で、紫の花の名前をささやく。まるで大声で言うてはいけない、特別な神様の名前のように。お姉ちゃん、あのね、こどもの名前はね。

「花の名前だわ」

「うん、お姉ちゃん」

「名前のあるこども」

「うん」

彼女は、放心したように、屋上の地面に膝をついて、ぼろぼろと

泣いた。姉が泣いたのを見たのは何年振りだろう、と考えて、しばらく細かい顎を伝って零れおちる、煌めく滴を眺めていたら、いつの間にか私も泣いていた。今ならなぜ私が泣いているのか、分かるよ、お姉ちゃん。

決めた。

小さな声で、こどもの名前を呟く。作品のタイトルは、花の名前にすることにした。

(理学部理学科一年)

「今さらになって悲しいの、継美」

「うん」

「あの子が死んだことが」

「うん」

私も、悲しいよ、お姉ちゃん、と言った。そうして二人で、泣いていた。

私たちは死んだこどもに、名前を付けて、意味を付けた。

それは勝手なことかもしれないけど、でも、実際に生きているっていうのはそういうことなんじゃないかと思った。世界にはとかく無駄なものが多い。でも、無駄がなければ、それは生きているとは言えない。

花の名前を、小さな声で呼んでは、また泣いた。

気がついたら、あたりはうす暗くなっていて、空の遠くのほうがスマイレ色に染まっていた。それでもまだ、声をあげて泣いていた。

作品展のパネルの締め切りが迫っていた。

私は、いつも行く画材屋で、固形の水彩絵の具を買った。

「アクリルはもう止めたんですか？」

顔見知りのお店の人にそう聞かれて、私は少し笑った。

「そういうわけではないけれど、ぼんやりした、やわらかいものを描きたいんです」

こどもを描こう、と決めた。

柔らかくて、暖かくて、ちゃんと重みのある、こどもを描こうと

選考を終えて

総評

選考委員長 小野 友道

第二回東光原文学賞の選考委員長として、挨拶を申し上げたい。今回は応募総数二十篇であった。昨年の二九篇と比較すると少し減少したのは、いささか淋しい思いもしたが、学部学生一年から四年生さらに院生からの応募もあった。まず図書館スタッフによる一次選考がなされ八篇が二次選考の俎上にあがった。

二次は西川盛雄名誉教授、岩岡中正教授そして小生の三人が図書館長からの依頼で選考に当たった。前もって八作品を各委員が個々に審査し、それぞれが四篇を選び持ち寄っての合同審査を行った。その結果三審査員ともに四篇中に「祭囃子」を選んでいった。大賞としてはかなり議論もなされたが、結局、本作品に落ち着いた。構成がしっかりとなされ、文章力もあり、全体的な完成度を岩岡委員から評価された。またその背景にいつも聞こえる祭囃子の音を西川審査は聞いた。作者のかなりの力量が評価されたのである。小生も異存なかったが、「けもの神輿」に出くわしたあとの描写にもう少し神秘性が表現されたらさらに迫力が増したかとの印象を持った。「空白」も力作であった。先輩の腕にもリストカットを垣間見た物語は秀逸で、重たいテーマであるが、その中に温かさ、優しさも汲み取れ、丁寧な文章であった。大賞に伍した作品との意見もあった。「ふこうのこども、幸福な花。」も姉妹の淡々とした会話、人物描写

の中にいろんな思いを抱かせる文章が、重たいテーマをかえって浮き出しており、いい作品であった。

「瞳の中に夜を視る」も「アストロノミカル・セラピー計画」のアイデアがすばらしかった。研究者の悩みも良く描かれていた。猫と宇宙の神秘性に惹かれて読んだ。「Science is not enough」とアメリカの生物学研究者が言っていたのを思い出した。

以上の優秀作品三篇はいずれも選考委員の複数が優秀四篇に「ミネートしていた作品であった。他に小生としては「散華月さんげつき」を評価した。構成がスマートで、祖母とのやり取り、山月記の引用も巧みであった。

全体的に少々誤字・脱字など不注意が見られたのは残念であった。また言葉の使い方などもう少し工夫があればと思わせる作品があった。

ともかく審査委員として、熊大生の力を感じ、楽しい時間を過ごせた幸せに感謝したい。

来年度の更なる応募を心から期待して総評とさせていただきます。

おの ともみち 熊本保健科学大学学長・熊本大学顧問

講評

想像力を捕捉する言語表現力への挑戦

選考委員 西川 盛雄

小説には構成が重要な役割を果たすと同時に文章表現の正確さも重要な要素である。この文学賞の趣旨も学生諸君の物語の構成能力と文章表現能力の向上を目指すところにある。

本年度の応募は昨年度より九編減って二十篇であったが選考に残った八編の作品はなかなかの力作であった。特に大賞あるいは優秀賞に入った作品はテーマの真摯さに加えて想像力とそれを言語によって捕捉する表現力に優れたものがあつたといえよう。

大賞を取った『祭囃子』はいかにも日本の民話調の作品である。巾着を失くす、そして戻ってくる。この間の経緯を人と狐のそれぞれ異次元の交差という観点から描いて出色のものがあつた。作品に昔話・御伽噺の世界を組み込み、現実界と異界との往還をダイナミックに展開して不思議な言語空間を作り出している。言語表現においてもオノマトペや色、比喻表現など表現効果を良くする工夫が随所にみられた。何よりも恒常的に聞こえてくる背景の祭り囃子の音がいい。

優秀賞を取った以下の三つの作品も記憶に残るものであつた。

『瞳の中に夜を視る』はプロットがよく考えられている。文体も無理が無い。話の展開は科学(天体、天文)の世界を織り交ぜて魅力的である。猫の瞳の象徴と線香花火の象徴が際立って面白く出来上がっている。誤字脱字などが若干あつたが許容範囲内であつた。

『空白』は保健センター絡みで主人公があるセラピーを受けている事がわかる。「話すー離す」「ここにおける松本君」など表現上の

無理があるものの「造花」の象徴性が印象的であつた。学生に身近な部活(写真部)という身近な場面設定で、テーマも死をめぐる真摯なもので過酷な青春の一群像がきめ細かく描かれ、好感のもてるものであつた。

『ふこうのこども、幸福な花。』は総じていい作品で落とし所はよかつた。「美しすぎるものは破滅を招く」というフレーズの展開は暗示的で名前と意味づけの関係をテーマにして印象深い作品になっている。

他に印象深い作品としてシュールレアリズムを髣髴とさせる『夏の腕』のようなチャレンジングな作品や中島敦の『山月記』に掛けた印象的な作品『散華月』のあつたことはここに記しておきたいと思う。

小説には定型はないが自ずから人(読者)の視線に触れる作品と触れない作品がある。触れる作品は作者個人の主観的な領域を超えてどこか他者と共有できる共通のものが確かにあるのである。古くて紋切り型からくる種々のつまらなさを脱し、かといって奇をてらうものでなく、人間性への模索と普遍を目指す志が時や場所を超えてさまざまな作品を生み出し、さまざまな人々を繋げていくのだと思われまふ。ここではたらいしているものは言語、「ことばの力」なのです。これからも諸君の想像力と感性を捕捉する言語表現力への積極的な挑戦を期待いたします。

にしかわ もりお 名誉教授

講評

選考委員 岩岡 中正

今回、昨年より応募数はやや減ったが、選ばれた作品の質は確保されたと思う。それぞれ多少の問題はあれ、着想、構成、表現でものとらわれない、若い人らしいユニークさと自分なりの彫琢のあとが見られる作品で、楽しく審査した。

四篇の優秀作のうちの大賞の「祭囃子」には、安定感がある。これは、この世の祭と「けもの神輿」の二つの世界を、子供の眼を通して描いたもの。表現は丁寧で、主人公・里久が落とした巾着の役割や、人間の「リュウジさん」と狐の「安吉」の二重写しなど、構成もうまい。民話風の楽しさもあって、誰の心にもある童心を誘うほのぼのとした味わいがある。表現がやや常套的だったり少し説明過剰なところもあるが、全体として完成度の高い「読ませる」作品で大賞にふさわしい。

優秀賞の「空白」は、リストカットの問題や自分の「生死」や「存在」の意味を考えるという重いテーマだが、対象との距離をよく保って内面描写に優れており、物語の展開もスムーズ。その点で、節目目に入れられた空白も、撮影を通して自らを写す写真という道具も効果的。写真部の人たちとの関係を通して自己を回復していく過程が丁寧に描かれ、苦悩から一すじの光明を見るような思いで書かれた姿勢に、共感をおぼえる。「造花」や「空白」にややこだわりすぎたきらいもあるが、大賞と甲乙つけがたい作品だ。

優秀賞の「ふこうのこども、幸福な花。」は、表現力もありストーリーもよくまとまった作品。これも重いテーマなのだが、文章も会話も軽快でセンスが良く、人物描写も確か。姉との葛藤や愛憎、そ

れに死んだ子とその名前をめぐるナイーヴな感覚や表現が魅力だが、それがときにパターン化して甘くなることもある。

優秀賞の「瞳の中に夜を視る」は、テーマの「アストロノミカル・セラピー計画」や、「猫が夜を吸い込んで昼を作る」という猫と宇宙の関係をめぐる発想が、壮大でユニーク。好奇心あふれる作品である。宇宙をめぐる科学研究と、その原点である宇宙の神秘への憧れとの

葛藤が自分のことばで語られるところが魅力。これもひとつの科学小説かもしれない。ただ、同僚の白坂との会話などにやや冗漫なところもあり、もう少しストーリー展開や文章表現での切れがほしい。

その他、「灰色のサル」は、平凡な日常に現れた不思議な灰色のサルをめぐる話を、軽いタッチで描いた透感のある作品。惜しくも入賞を逸したが、日常の中のふとしたエアポケットのような意識の空白や、さらには「存在」の危うさのようなものをうまく暗示した作品として、心に残った。

いずれにせよ、今回めでたく入賞した作者も、惜しくも入賞しなかった作者も、それぞれの「これから」に期待したい。

いわおか なかまさ 法学部教授

東光原:熊本大学附属図書館報
第57号 平成22年3月刊



発行 熊本大学附属図書館
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
Tel. 096-342-2212 Fax. 096-342-2210
編集 永田正次 成田和則 浦田博臣 森下和博
廣田 桂 後藤友紀 岩岡仁美 笠 彩子
村上慎哉
URL <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>
